四六

四七

に身をなんなけてけり女きゝておひつきて共に沈んとせしを付添たる女のからうしていたきとゝめてなん舟にのせ歸りぬさてよめる

古郷の木ハたの里にあらねとも君を思へは舟もこそひけ

此女ハ木ハたのさとより出來りてつかへけるものとそ又かのおとこはゝりなしとかやいへる川に竹にはあらて生さかりたる松のえになんかゝりて死たりけるかきたりける衣のつまに哥をなんかいつく

くゝりめのなきとないひそひとりのゝ尻なし川に身をハすつとも

といふ哥の心はへおしはかられていと哀なりやむかし人はかくいとわかきいやゝをなんしける

説ニ曰此西のかたは少し川をへたてたれハつれ歸りたるハもし駕にてもやあらん作りものかたりのならひ舟とかきなせるにやおほつかなし

〔編者曰ク原本此ノ所壹行空白〕

一　九月廿九日夜　道頓堀火

角の芝居より出火東は日本橋西角迄東角倒ス北は川切南は坂町うら天神前迄西は角の芝居角迄

攝州西成郡中島長柄橋本寺（ナガラハシモトデラ）蒲田村（ガツダ）大願寺

奉書寫紺紙金泥法華經全部

開基大聖人三百九十年
長柄人柱岩氏一千二百年　諱　世話人

今年乙丑より後八箇年せバ開基大聖人三百五十年御正當忌にあたらせ給ふ依て近き丁卯のとし當寺において御報恩會修行　兼又長柄人柱岩氏靈が一千貳百年忌にあたるを以てこれか追福の佛戛をも營ミたき心願なり夫當寺ハ人皇三十四代推古天皇勅建の靈場也彼の御宇　帝勅宣ありて長柄の橋をはじめて造らしめ給ふ南ハ難波より北ハ垂水棹指宮に至るまて二里の間一貫の繼橋也中に宿水ふかくして底を知らざる地あり橋柱を下さんとするに止らず故に　帝大に令を下して垂水の邊に關を設け人柱の命を負ふものを待生人を土中に埋んで後土を祠を人柱（きるといふ）　爰に岩氏（いわじ）といふものあり關を過る時失言すらく（はかまのまち）裾襠に綴あらんもの是人柱の器なりと關吏その言に依而これを檢ずるに岩氏その人なり遂に方五尺の石櫃に生ながら岩氏をいれて水底に埋む日あらずして島橋成りぬ其地五穀豊饒にして士民こゝに家居するもの夥し今の中島これなり時に　帝岩氏か艸言に陷し戛を憐ミ給ひ人柱の淵の邊に蘭若を建立し　勅して號を孤雲山大願寺と賜ひ岩氏が爲に墳墓を築き五輪を建しめ給ふ岩氏が一娘ありその母これを河の絹野德永某に嫁す　言ざる戛年久し夫啞なりと思へり古郷に歸さんと欲して自ら弓矢を　挾んでこれを護り鄕里ニ送る將に垂水に近からんとする時雉の高岡に鳴るあり夫　立に射殺す時ニ女哭して歌て曰〳〵ものいわじ父ハ長柄の人柱雉もなかずバ射られざらまじ。夫大に驚き始めて啞ならざる事をさとる且死たる雉を見るに三足にして常ならず夫憐ミて路傍に丘墓を築く今其地を雉繩手といふ　推古より後嘗て何の世ぞや大願寺もまた亡ぬ故に古歌に曰〳〵長柄なる橋本寺も盡るなりおこさぬ家を何にたとへん。橋本寺とは則大願寺を言ふ人柱ハこれ島橋の基本なるを以て名とす　後一條帝の寛仁三年己未の春三月　勅して大願寺を再建し重て岩氏か冥福を資くこゝにおゐて宣旨ありて人柱の邊

に古橋の遺槪を堀取て佛工定朝に命して地藏大士の像長八寸ばかりなるを彫成て安置し日を經て無遮の大會を修す　勅使大納言藤原公任進んで像前に至り胡跪合掌して聖旨を啓し訖て亦自倭歌を唱上し曰〳〵長柄江や藻に埋し橋柱また道かへて人渡すなり。時に其尊像微笑の色あり此日山川晃耀し天より寶花をふらす公任大に歡喜して禁裏かへり具に奏す　上嘉歎して不止凡朝野遠近視聽するもの手柝て奇なる哉と稱ぜすといふ叉なし是より世人呼んで難波の笑ひ地藏といふ又一百七主正親町の帝天正元年人柱の池中に毎々　異　光明ありて現す　近　村に燭破する叉　旭　光の射るがごとし鄕民羣集して水を泳るものをして潛に水底を窺ハしむるに物の有がごとしまた水人若干を足して深く入り細かに見るに一の石の櫃あり更に蓋を扛るに空　櫃　中にたゞ不動の像長一尺餘なる儼然として在す久しく泥中に沈むといへども全像少しも缺ず　鄕民旨龜の浮木に値る思をなし涙を流して伏拜む此夜より光明　卽　止む想にそれ舊寺の廢せる頃ひ尊像　自　飛んで時を池中に觀ずる歟また岩氏が一生隨身にして起居身を離れざるなるべしちからずんバ何水底にして在叉を得ん爾己　來靈驗年曆尊貴日にあらたなり然るに岩氏人柱に入し　推古の御宇より年歷を數ふるに來ル丁卯年に至る迄一千貳百年の星霜を經ぬ依而尊聖御遠忌の法筵を　幸　として岩氏が追福をも營ミたく思ふといへども堂宇大破に及び今の儘にてハ佛叉も勤がたし元來無緣寺にして檀越の資もなけれバ此度思ひ立法花經壹部黃金を筆端に染め紺紙に書寫し　卽　御開山御報恩幷ニ人柱岩氏靈が追福にそなへ且施主の面々現當二世諸願成就　所志之精靈菩提のために一字銀壹分宛の施入を勸て當寺　諸　宇の修覆をも加へ御法叉をも營ミたき心願にて助力を四方に乞ひ求るのミ

蒲田村大願寺邪ハ崇禪寺馬場少し北

大願寺現住

扇樹院日皖

文化二乙丑九月

世話人中

一　開運撫牛

諸人信じて蒲團を縫て土の牛に敷せまたハ脊ニ着せて富貴を祈り燈明供物を獻じて祭ル事流行ス

〔編者曰ク原本此ノ所壹行空白〕

一　四月廿一日　難波村公家の衒禁獄

難　波　村　住　松　森　修理　當丑四十四歳
京今出川廣小路　原　田　稽　之　助
同　御　靈　圖　子　秋　塚　右　衞　門
下立賣新町西ヘ入町　大　石　屋　藤　藏
同　大　佛　瓦　町　大　和　屋　忠　八
同　七　條　大　宮　杉　浦　屋　小　市
同大宮三鐵下町　熊　膽　屋　五　郎　介
同西陣枕町　こまりの喜兵衞
同　肩　町　いてこいの　長

奈爾葉奇談大意

攝州西成郡難波村松森修理ハ越前國丹生郡菅谷村百性六三郎といふ者の悴也先祖は武田家の馬廻り保紫野六

郎兵衞重季の末孫なるが武田亡家の後越前菅谷村の農夫と相成十代目六三郎の子にして寶暦十二年年の產幼名長八郎といふ安永六年酉の三月十六歳の時生國を亡命して尾劦名古屋へ來り十番町藥種屋郡平といふ者の世話にて御典藥鈴木三節方に足をとゞめて有髪と成り保紫野長伯と名のり勤學の内樣々の惡事をもくろミ勢劦四日市の賣女たよを勾引て六反田浦より海船に乘りて豐前國小倉に至り其後肥前名古屋にて醫者を業とし此處にても惡事有之入牢之上追放の身と成夫より長崎にて按摩をなす内醫術を行ハれしが又此處にて富家の娘を盜ミ出して浪花へ來り高津新地九丁目賣藥屋仙藏といふ舊友の惡黨の世話にて難波村東の口にて借宅なし住居の内右の娘一子を產たり或時仙藏來りてひとつのもくろミをいふ其手段は昔より大坂市中を賣歩行藥商人いろ〳〵異樣成事を思ひ寄といへどもいまだ乘物に乘りて振賣の藥賣といふものを見ず原來人品雲上なる長伯なれバ立派なる醫者乘物にて駕舁四人弟子貳人草履取藥箱持挾箱茶辨當を持たせ町々の辻にて乘物より出て長伯の辯舌にまかせ功能と又施藥の爲に順行のよしを述町家の兩側を積氣（癪）と頭痛の藥を世話方の者持歩行なハ相應に賣れるべし又長伯の相貌人柄にほだされて察脈を乞ふ者もあるへし醫案をのべて藥を遣しなバ是亦相應の禮金も集る事疑ひなしと此一趣向を咄しけれハ頓に長伯も同心して其用意を調へ夫より高津梅ケ辻妙德寺といふ法華宗の寺を借て旅宿と見せかけ先初日ハ高津道頓堀島の内邊を廻りける其出がけハ二ツ井戸に乘物を立て長伯ゆう〳〵と出て口上を述る

予ハ尾陽の官醫の子也京師に在て醫官の家に養ハれ春秋を送れども多病にして官に（候）侯する事あたハず此故に今温泉を尋ねて病ふを平治せんとて身儘の身分となる門人等が進めていふは幸なる哉師道すがら家

製の妙劑をハ施シ世に頭痛をやミ積(癪)に苦しむの輩を愈して廻られなバ必しも利益廣大にして醫王藥師の本願に叶ひ神農氏も悅びの眉を開くべきかと門弟子の進めに依て當所梅が辻妙德寺をハ旅宿として家傳の頭痛藥五積(癪)の妙藥を專ラ世に弘む尤施藥にもせまほしく思へとも施藥非(悲)田の兩院ハ禁中の官院にて施藥といふハ世渡りいたしかねし者へ施すの官也施藥院へハ禁中より千石を給ハり悲田院とは病人を介抱するの所也武家の天下と成りては名のミ殘りて悲田院の舊地には非人住居して其號斗り殘れり施藥院は子孫續ひて公儀の御醫師と成り千石の內施藥師を返上して施藥はゆるされたり今知行五百石を領し苗字を三雲と呼び院號ハ施藥院とて京都中立賣の烏丸にある箇樣のわけある施藥成ハ中々勅命台命をも蒙りし上ならでは一切施藥は成がたし依之施藥とてハせず唯此妙藥の價三十錢にて諸人に與ふ望の人は遠慮なく所望あるべしまた施脈の事ハ何のかまひかあらん依て向寄の町々にて施脈を望ミの方あらハ案內をせらるべし五臟は何の臟に病ひを生じ夫故箇樣〳〵と發病の始めより今病惱の所までを明らかに演述して方劑ハ何を以てこゝを主治させ何を以てかしこを愈し全快の道を指揮すべし又難治の病性をバ見る時は親族の內へ其實をのべて豫め用意をも致さしむる事也何れも心置なく申さるべし

と辯舌は懸河の流るゝごとく一言半句もよどみなふ申述る又折々ハ五臟六腑の道理を講し大略の利を述るに義理明白にして聞もの耳を傾け寔にうつり安きハ浪花の人氣にて我一と頭痛の藥を調るもあれハまた施脈を乞んと招くもあり長伯病家に至りてハ益人柄を繕ひ辯舌を以てその家族の心をとる尤藥を乞ふといへども固辭して與へず達て所望すれハ則あたふるに相應の禮謝は出せりかく仰々敷體相にて大坂市中を徘徊する事ゆ

へ　公聽ニ達し御聞合ありけるゆへ長伯も是非なく第八日目に相止ける其後保柴野出雲と名乘專ら公妾などの御大法師と成り樣々の惡事をなしける內或時京都堂上方へ所用ありて上京する三十石の船中にて京下立賣新町西へ入町大石屋藤藏といふ者と心安く成たるが官家衒事の根元也其翌日右藤藏出雲の旅宿をとふらひ同氣相求ると既に密計に及ぶ其趣意は今年筑前國香椎宮豐前國宇佐八幡へ奉幣使として四辻家御參向の所に東海道とハ事かハりて每度奉幣使の御通輿なき所ゆへ殊の外道中筋致よく金銀をゆすり取て何れも勝手よろしく有しゆへ此例にならひて此度花山家の諸太夫保利對馬守をかたらひ御代參の體にもてなし先觸を出させ凡人足三四十人馬八九匹上下廿人斗通行して旅宿を無賃にて通り衒り行ハ金銀を多く得るべし尤御代參の先觸并繪符桃灯は彼家より申受て下る事ゆへ道中ゆすり取てこれ畢竟相對通りの事なれハ何の子細なし此義同意あらバ其許を主君と稱じて御代參人とし幸ひ有髮なれハ諸人のおもハくよく髮は冠下地に結ひて齒を染めなバ京都の者が見るとても攝家淸花の公達と見ゆれと示し合せ出雲事その名を人にさられし身なるゆへ改名して松森修理と號し惡黨共夫々の役々を割付ケ用意全く調しかハ時は文化二年丑二月廿七日夜深に京都を忍び出山崎天王山にて行列の備を立て芥川に至れバ夜はほの〳〵と明渡りて東の山の端に朝日赫々と立昇りて誠にきらびやか成ありさま也森松修理ハ花車風流に粧ひ齒を黑々と染なし繼上下を着し髮は紫の打紐を以て結ハせ公卿の體相に打扮て金紋の先挾箱大(太)陽にかゝやき紫の伊達紐は朝紫の色榮えてねよげに見ゆる若艸の薄萠黃の羅紗を袋とせし長刀一振靑侍四人輿脇は各絹衣の美を盡し爪折の參內傘跡箱沓持等を列し跡押には原田六郎雜掌役なれハ引戸の駕籠に乘り鑓挾箱長柄を持せ先荷の長持其外馬荷等にてザンザめかし大石屋藤

藏は用達町人の體にて引下りてゞ行ける先攝州郡山の宿を手初めとして西の宮兵庫の津を過て舞子の濱にて本願寺の使僧御書の長櫃に行合雙方權を爭ひしより露顯の絲口とは成れり斯共知らず播磨姫路備前岡山備中撫川同國廣瀨同國岡田藝州宮島に至る頃既に皆々召捕れ大坂に禁獄す其後當人死罪

大石屋藤藏ハ前日に逐天せしかど天網遁れず豫州川上福濟寺に潛り居たれ共尋出され七月上旬召捕れ大坂西御番所へ召連來り獄舍につながる

扨も播州明石郡奉行本願寺使僧教泉寺より屆書の趣キ早速領主松平左兵衞佐殿へ披露に及ひ大坂藏屋敷留守居より　御町奉行水野若狹守殿御役所へ相屆ハ其子細は

口上覺

當御門主使僧教泉寺義先達而御屆申達ハ通當二月中其御城下向寄再建勸進の爲改ハ而歸路に至りハ所當三月二日御領地舞子濱通行之所ニ花山院家代參ニ出合ハ所不禮之義相咎ハ由御門主使僧ニハ得は彼家之代參とて格別ニ格式を失ひ尊敬可致譯も無之段申答ハ所内　宣を蒙りて　中宮御產祈之爲御代參之旨申ニ付則怪敷存ハ而彼是問答ニ及ひ引別レハ得共萬一實々の義にてハ恐多奉存ハニ付引返して明石驛迄立歸り花山家代參小休ニ於て段々相詫ハ得共不聞入ハ故無是非其趣にて順行致シハ而御門主へ相屆ハ所紛之上怪敷疑しきニ付紛之上可被申達被存ハ得共爲念一應花山院家へ問合さるゝの所右體之義曾而無之旨ニハ條得其意御取計可被成趣之御返答ニハ依而此旨御屆置申ハ閒重而右之者御領分通行ハハゝ御差留置ハ樣被成度ハ猶御留置之上御通達御賴申入ハ以上

丑三月　　本願寺御門跡使僧

明石郡方　　教泉寺

御役人中

右の通屆之寫書差出し領分通行ハハゝ指留置可申哉相伺ハと申出けれハ掛り之與力段々紛の上にて若州へ相達シける所先達而桑原權九郎差向置れしなれハ早々此旨申遣シ然るべしと評義有て左之通下知ありけるまた明石の留守居へは右怪しき趣相聞え有之ニ付召捕の爲先達而組與力を差遣し置たる也然る上は猶又今日屆の趣申遣シ召捕さすべく旨もし下筋にて行逢がたき義もハハゝ其領分ニ於て召捕す事も可有閒其砌には加勢の人數差出さるゝ樣の計ひ可有旨水野若狹御役所に於て明石留主居へ申渡シ相濟ける尤先達而中國筋外召捕を相兼差向られける町奉行組與力桑原權九郎其外兵庫西宮等の勤番所へも右之段相達られけると也御城代阿部播磨守殿へも御心得の爲御沙汰に及ハれける是はもし此方より御聞に達せざる內風聞等御聞に入らバ如何との了簡にて申屆られし也則夫々への達書を爰に載す是は得がたきもの成共傳手を求めて密に寫し取たる也都而此書は少も虛談を解ずして眞實をのゝ書たれハ見る人々よく〳〵可有心得事也

心覺

水野若狹守

佐久閒備後守

花山院家代參之由先觸差出シ中國筋旅行之者有之道中筋ニ而權威ケ間敷事又は高聲に申訇り或は高貴之弟など、相唱へ見見へを受禮金等申受旅行の由然所明石驛に於而本願寺使僧ニ行逢ゟ處花山院家代參と相唱ゟ得共實は蒙内勅　中宮御產祈之爲　奉幣之趣申立ゟニ付使僧歸京之後詫之爲花山家へ出段々相詫ゟ處彼家ニ於而一切不存之趣ニゟ依之明石通行ゟハ、留置ゟ樣致度旨使僧より明石表へ申立ゟ段松平左兵衞佐より屆有之ニ付右の者通行の由先達而西宮勤番之與力共より屆ニよつて組之者中國筋へ差遣シ怪敷義見當り次第直樣召捕ゟ樣申付遣シ置ゟ然ル所前段之通ニ付則組之者差向有之間下筋ニ而召捕ゟハ、其旨相達へし若城下通行之義もゟハ、召捕可申段左兵衞佐使者へ相達シゟ條左樣ニ御承知有之度ゟ旨本願寺へも相達其旨左兵衞佐方へも申遣シゟ勿論組之者へ申付ゟ而差遣置ゟへ共右之通不屆之義露顯ニ及ひゟ上ハ怪しき義見屆不申共召捕可申旨申遣しゟ此趣申上ゟには無御座ゟ得共心覺を以て御聞ニ入置ゟ事

丑　三　月　　佐久間備後守

右之趣阿部播磨守殿へ御進達也

剪紙を以て相達ゟ然者先達而申含ゟ花山家代參之者怪敷品ニ及ふならハ見付次第可召捕旨申遣シ置ゟ得共此度彌以て虛僞明白ニゟ條召捕可被申ゟ尤手ニ餘りゟハ、向寄之城主領主御代宮等へ加勢申談シ可召捕ゟ此段相達ゟ以上

三　月　　桑原權九郎殿へ　　水野若狹守

其驛々へもし花山院家代參と申罷越ゟ者有之ゟハ、指留置訴出へくゟ將亦此書狀は宿送りを以て權九郎方へ可相達ゟ此書面行留り之宿より權九郎へ可差出ゟ若滯るに於てハ可爲曲事者也

丑　三　月　　備後印　若狹印

右之通御屆にはあらね共心覺を以て御城代へ御達相濟けれハ明石への返答ハ使者を向られ申渡さる兵庫西の宮の勤番所へも御達に及バれける是は其驛通行せハ可被召捕旨也

西之宮より中國九州筋宿々問屋役人共へ

一　六月　島之内ねりもの

探　題　御簾の追風
見　付　臺　競　馬　香
嘶　子　芳埜　名　所　香
龍　田

文化三　丙寅

一

一　三月　住吉五大力菩薩開長

一　四月　御靈社内あやつり芝居玉藻前大當り

右新淨瑠璃は玉もの前の繪本出板ありし夫を聞かけとはいへ共朝吉大明神守らせ給ふといひ觸らす

一　七月　竹村雪啓先生死

壽譽海山信士　下寺町遊行寺ニ墓あり

辭世　世にをきし露か水のむ末期哉　飛梅

一　同　廿九日夜　道頓堀火

夜八ツ時中の芝居より出火南は法善寺西ハ大西芝居東鄰東は千日前西角ニ而火鎮ル

一　七月廿五日　二代メ　淺尾爲十郎死　行年廿八歳

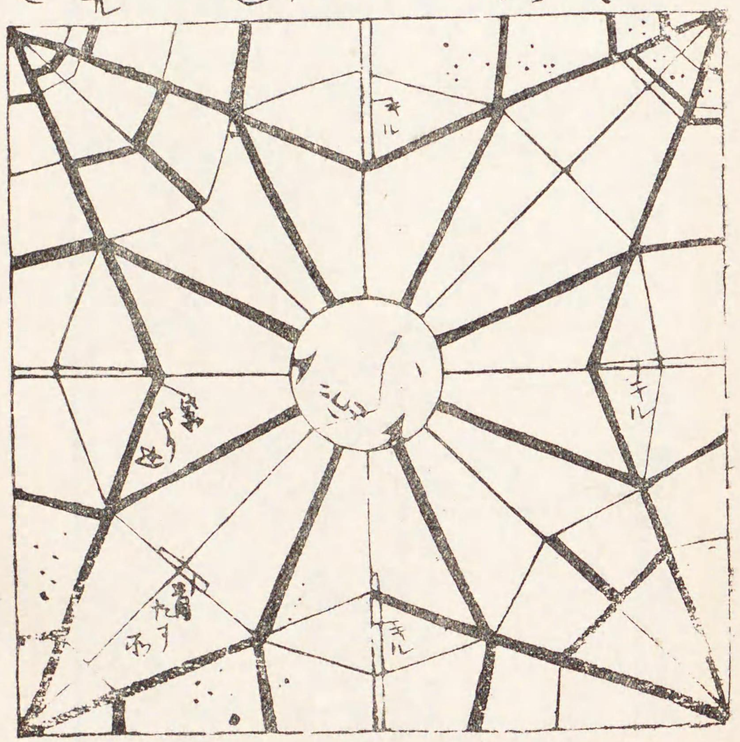
〔編者曰ク原本此ノ所壹行空白〕

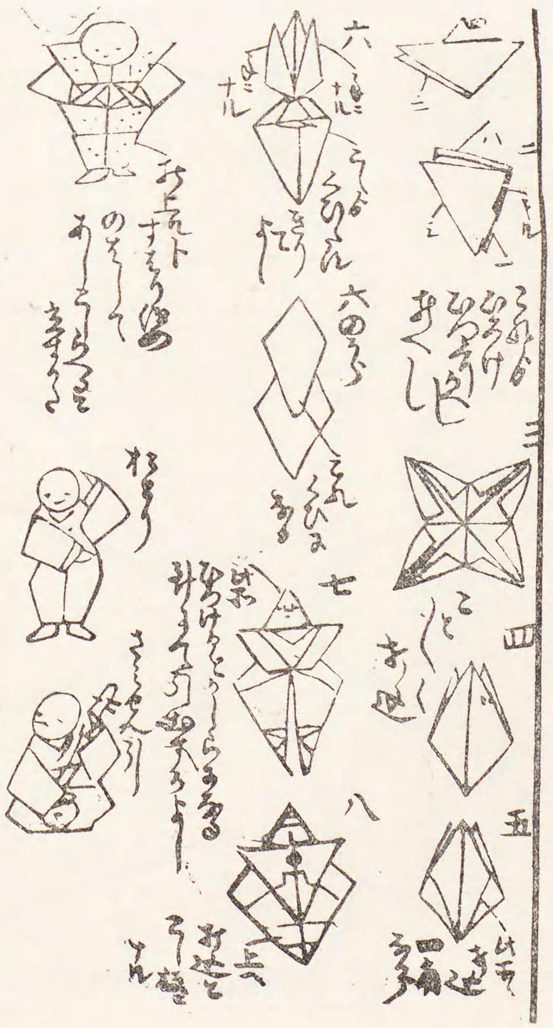
一　八月　讃州盜人魁首　曉星右衞門といふ者の手下　凡八十人餘召捕　盜賊方　桑原權九郎　安藤丈五郎

一　今年　福助折形流行

一　それより人物花鳥さまゞの折形を工夫なす福介折の工夫　次ニ圖アリ

福助粉板工夫の傳





文化三丙寅卯月吉日　改

東　西

御関位　宮金元相撲

大関　菊　嵯峨
関脇　浮山　嵯峨
小結　菊谷　嵯峨
前頭　雲　嵯峨
同　寫　嵯峨
同　但　嵯峨
同　菊　嵯峨
同　野川　勾當
同　橋　勾當
同　小野村　勾當
同　紅　勾當
同　い　せや　重

大関　菊　永　嵯峨
関脇　市　浦　嵯峨
小結　菊　澤　嵯峨
前頭　高　倉　勾當
同　菊　橋　嵯峨
同　中川　嵯峨
同　政　寫　勾當
同　松本　さ香　勾當
同　い　九

菊　嵯峨　亀岡　勾當
菊　嵯峨　鰐　勾當
菊　嵯峨　玉澤　勾當
菊　嵯峨　笠尾　勾當
菊　嵯峨　小野寺　勾當
菊　嵯峨　竹　勾當
菊　嵯峨　吉元　勾當
菊　嵯峨　秀川　勾當
菊　嵯峨　春本　勾當
菊　嵯峨　宮川　勾當
菊　嵯峨　松尾　勾當
菊　嵯峨　城　勾當
菊　嵯峨　豊盛　勾當
菊　嵯峨　松之　勾當

菊　嵯峨　西村　勾當
菊　嵯峨　亀岡　勾當
菊　嵯峨　益山　勾當
菊　嵯峨　實尾　勾當
菊　嵯峨　亀鶴　勾當
菊　嵯峨　廣　勾當
菊　嵯峨　藤永　勾當
菊　嵯峨　慶松　勾當
菊　嵯峨　鷹橋　勾當
菊　嵯峨　長岡　勾當

菊　嵯峨　三橋　勾當
菊　嵯峨　茶筒　勾當
菊　嵯峨　長尾　勾當
菊　嵯峨　岡谷　勾當
菊　嵯峨　雞波　勾當
菊　嵯峨　菊尾　勾當
菊　嵯峨　高　勾當
菊　嵯峨　春之　勾當
菊　嵯峨　鶴

菊　嵯峨　熊

菊　嵯峨　永　浮山

菊　嵯峨　永　菊嵯

行末廣師　同　鶴ウ

世話人　泉　皮　毛　さく　茶　甚　吉　ひめ　紙　浅水　伊　吉　山　し　ケ　加　美　平　吉　百　佐　善　助　味噌　安　吉　和　助

頭取　和歌山　嵯峨　八重　永　松　枝

文化四　丁卯

一

一　正月　御買米

家數合　三百十四軒　奥ニ名前記ス

金高合　百廿五萬千兩

一　四月廿二日より　天王寺引導鐘鑄佛事　同廿六日迄

一　五月廿四日より　淀川大水

六月一日より亦々大雨ニ而水增京都白川筋悲田院邊より切込ミ二條ニてハ白川加茂川ひとつニ成五條ニてハ高瀨川加茂川ひとつニ成三條五條兩橋殘り其外悉く流失ス桂川すぢ久世ノ橋并嵯峨の橋落淀川筋高水河州茨田郡八番村より切込（切所六十間餘）攝河兩國水入郡村數凡貳百五十箇村高凡十二萬石餘　攝刄東生郡ニ而櫻之宮邊を態と切にて込ミ水を西海へ落ス

一　七月六日より　竹田近江大掾百回忌追善

角の芝居ニ於て三日ノ間　中ウ芝居二日　あやつり一日

一　同　廿五日　狂言作者二代目竝木正三死

〔編者曰ク原本此ノ所壹行空白〕

八化四
卯五月
中旬
淀
大切二ヶ所
同小切七八ヶ所
高槻
宇治川
小倉
大切二ヶ所
大切
大切

淀
東寺
桂川
白川
五條通
加茂川
五條橋
八ぢん河内
切通

一　九月上旬　彗星出ル

一　十月十一日より　天王寺引導鐘撞初　同十五日迄

〔編者曰ク原本此ノ所壹行空白〕

一　御買米　石高

三萬三千石

今橋二丁目　鴻池善右衛門

玉水丁　加島屋久右衛門

三萬石

高麗はし　三井八郎右衛門

和泉屋次郎右衛門

二萬五千石

大川丁　加島屋作兵衛

内平野町　米屋平右衛門

和泉町　鴻池又右衛門

今橋二丁目　鴻池善五郎

吉野屋町　辰巳屋久左衛門

今橋一丁目　平野屋五兵衛

立賣堀　近江屋休兵衛

壹萬七千石

安土町二丁目　炭屋安兵衛

東堀　炭屋善五郎

七二

壹萬千石

玉水町　島屋市兵衛

今ばし一丁目　天王寺屋五兵衛

壹萬石

高らいはし三丁目　油屋彦三郎

瓦町　川崎屋三右衛門

四軒町　平野屋仁兵衛

平野町　紺屋善右衛門

瓦町　鐵屋庄左衛門

島町　大黒屋源兵衛

戎町　和泉屋吉右衛門

今橋二丁目　鴻池庄兵衛

尼崎町一丁目　鴻池市兵衛

今橋一丁目　山本三四郎

梶木町　升屋平右衛門

梶木町　天王寺屋伊右衛門

過書町　天王寺屋忠兵衛

梶木町　千艸屋宗十郎

今橋二丁目　平野屋孫兵衛

北濱二丁目　鹽屋孫左衛門

江戸堀　加島屋五兵衛

船丁　加島屋作五郎

玉水丁　同重郎平

玉水丁　同安兵衛

船丁　助松屋忠兵衛

中之島　山家屋權兵衛

長ほり　泉屋吉次郎

内平野町　日野屋松次郎

内平野町　米屋長兵衛

雨替町　小橋屋伊右衛門

七三

本　町　平野屋新兵衛
平野町二丁目　茨木屋安右衛門

七千石

ざこば　大庭屋次郎右衛門
木挽丁　松屋清兵衛
久寶寺町　小橋屋兵之助
尼崎町二丁目　鴻池清兵衛
うつぼ　吹田屋六兵衛
北久太郎町三丁目　近江屋富太郎
平野町　油屋德三郎
同　泉屋六郎右衛門
京はし二丁目　鹽屋彌兵衛
境すし　平野屋惣兵衛
吉野屋町　川崎屋武兵衛
さかいすじ　升屋傳兵衛

五千石

堂　島　播磨屋仁兵衛
平野町二丁目　米屋喜兵衛

釣がね丁　島屋利右衛門
高らいはし壹丁目　紙屋市右衛門
中船場丁　和泉屋次郎右衛門
七郎右衛門丁　天王寺屋彌七
劍先丁　葭屋傳右衛門
平野町　炭屋彦五郎
同　海部屋善次
高らいはし二丁目　升屋九郎右衛門
四軒町　上村屋九兵衛
宇和島丁　雜喉屋三郎右衛門
天滿市のかい　吉野屋九右衛門

今はし二丁目　鴻池清兵衛
尼崎町三丁目　米屋伊太郎
高　一　越後屋藤介
天滿市のかい　大根屋小兵衛
大豆葉丁　具足屋七左衛門
天　滿　紀伊國屋嘉右衛門
瓦　町　廣屋德右衛門
江戸ほり　傳法屋五左衛門
尼　二　鴻池善之丞

三千五百石

北濱二丁目　肥前屋又兵衛
今はし　堺屋七左衛門
高らい　苧屋半兵衛
いづみ町　鴻池榮三郎
小くら町　米屋三郎兵衛
近江丁　光吉三郎兵衛

井筒屋平次郎
高　一　越後屋新十郎
京はし六　大鶴屋九藏
天滿市のかい　茶屋吉右衛門
立賣堀　備中屋利兵衛
瓦　町　昆布屋伊兵衛
備後町　櫻井屋八郎兵衛
尼　二　鴻池善作
同　加島屋萬兵衛

梶木町　尼崎屋七右衛門
今はし　紙屋次兵衛
高らい　鴻池和五郎
納屋町　大津屋吉兵衛
備後町　錢屋惣兵衛
堂　島　大島屋丞之介

貳千石

北濱二丁目　島屋市九郎
今二　堺屋佐兵衛
上人町　油屋次兵衛
呉服町　升屋長藏
道修町　内田屋惣兵衛
平一　日野屋長右衛門
内平　明石屋道阿彌
同　小山屋吉兵衛
平二　深江屋勘兵衛
　小西勘左衛門
本町　奈良屋宗左衛門
唐物町　信濃屋勘四郎
北久太　繪具屋吉兵衛
安堂寺町　大和屋利兵衛
白髪町　岩田屋七郎兵衛
北二　近江屋長左衛門
高三　鴻池茂兵衛
四軒町　油屋才介
道修町　袴屋仁右衛門
本うつぼ　袴屋かつ
船こし丁　長濱屋平兵衛
内平　同伊兵衛
平二　日野屋清三郎
同　米屋吉右衛門
本町　伊丹屋四郎兵衛
同　布屋平兵衛
雛屋町　生川屋吉左衛門
久ほうし丁　和泉屋卯右衛門
宇和島丁　ざこ屋藤右衛門
中筋丁　錺屋次郎兵衛

七六

あわはし　玉屋五兵衛
板屋はし　蒲島屋次郎吉
石灰丁　錢屋佐兵衛
玉水丁　島屋市五郎
　鴻池武介
大川丁　肥前屋八郎兵衛
玉造　萬屋小兵衛
津村東之丁　河内屋太三郎
瓦二　太刀屋庄兵衛
内淡路町　米屋十郎兵衛
堂島　天滿屋加藏
南瓦　河内屋もと
瓦一　辰巳屋市郎右衛門
同　近江屋與兵衛
上魚屋町　井筒屋庄右衛門
白子丁　綿屋武兵衛
介右衛門丁　泉屋次兵衛
白銀丁　淡路屋太郎兵衛
うつぼ　天滿屋市兵衛
堂島　堺屋善藏
北濱　阿波屋庄左衛門
上ばくろ　平野屋庄介
鹽町　錢屋彌介
南本町　刀屋武兵衛
鹽町　小橋屋理兵衛
江戸ほり　綿屋市右衛門
堂島　堺屋善作
淡一　日野屋三四郎
瓦一　近江屋八左衛門
安土　金屋彌太郎
上中之島　辰巳屋清兵衛
船町　加島屋幸七

齋藤町　嶌屋利右衛門
瓦一　近江屋仁右衛門
京橋五　長濱屋德兵衛
同六　信濃屋勘兵衛
内平野　日野屋惣七
同　長崎屋與兵衛
天ま旅籠丁　伊賀屋半兵衛
北富田丁　鹿島屋清右衛門
彌左衛門丁　大和屋甚兵衛
堂濱　難波屋太介
同三丁目　米屋喜兵衛
同　升屋源右衛門
北安治川　小西新六
南安治川　泉屋次左衛門
一千石
梶木丁　播磨屋九郎兵衛
同　天川屋他藏
尼崎丁　助松屋新次郎
同　鑰屋龍三郎
古手丁　和泉屋伊兵衛
吳服丁　鍵屋九兵衛
平野丁　小西長左衛門
淡路丁　同角兵衛
瓦一　大津屋新助
平一　日野屋善兵衛
南渡邊　藤屋新右衛門
油丁　布屋四郎兵衛
追手すし　山城屋孫兵衛
同　小川屋喜太郎
谷　米屋宗兵衛
本　丁大黑屋喜兵衛
二　布屋嘉兵衛

布屋町　伊勢屋藤四郎
江戸ほり　平野屋四郎五郎
油丁　田邊屋仁兵衛
しま丁　米屋喜介
内平野　日野屋七郎兵衛
天ま菅原丁　河内屋九兵衛
同旅籠丁　伊賀屋壽五郎
堂しま舟大工町　天王寺屋源之介
同濱二丁目　西村屋喜右衛門
同三丁目　堺屋善六
同　伏見屋八兵衛
同　大坂屋吉兵衛
南安治川　野田屋長兵衛
富島　藤田屋源七
北一　高津屋松次郎
尼崎丁　河内屋勘四郎
同　米屋助右衛門
四軒丁　伊丹屋三郎兵衛
伏見丁　鴻池次郎兵衛
道修丁　鳥飼屋猶藏
淡路丁　泉屋新右衛門
同　小西佐兵衛
平一　日野屋善六
津村西ノ丁　石川屋四郎兵衛
油丁　若林順藏
二ッ井戸　大和屋五兵衛
小西喜兵衛
追手すじ　泉屋理兵衛
谷丁　平野屋市郎兵衛
本二　吉村屋金五郎
同　板屋新兵衛

同　菱屋清兵衛
本　三扇屋利兵衛
米　二菱屋次右衛門
米子丁　布屋甚九郎
江戸ほり　明石屋庄右衛門
近江屋平右衛門
新天ま丁　大津屋權兵衛
うつほ　萬屋伊太郎
同　神崎屋藤九郎
海部堀　天滿屋甚九郎
せと物丁　伏見屋太兵衛
道修丁　平野屋彦兵衛
久々知屋治兵衛
天ま九丁目　綿屋伊兵衛
うをや丁　魚屋又兵衛
鍵屋伊兵衛

本　三泉屋利兵衛
雛屋丁　綿屋長三郎
唐物丁　八幡屋忠兵衛
常安丁　紙屋佐兵衛
ざこハ　鹽屋彌三兵衛
新天ま丁　大津屋伊兵衛
うつほ　古座屋武兵衛
同　八尾屋久兵衛
油かけ丁　天野屋五郎左衛門
せと物丁　伏見屋孫兵衛
同　和泉屋武右衛門
ゑなの丁　油屋清右衛門
天ま五丁目　文字屋九兵衛
同十丁目　綿屋太郎兵衛
北木挽丁　尼屋四郎右衛門
老松丁　和田屋利兵衛

老松丁　天王寺屋九郎右衛門
肥前屋與兵衛
うなぎ谷　吉野五運
北木挽丁　平野屋善右衛門
天ま　塗屋才兵衛
北久太郎町　奈良屋忠兵衛
久ほうし三　平野屋甚之介
綿屋作兵衛
安堂寺町　菱屋太郎兵衛
同　龜屋吉右衛門
玉造はし　加島屋三右衛門
本丁はし　米屋武右衛門
和泉屋市兵衛
ざこハ　蛇草屋八右衛門
順慶丁　河内屋與兵衛
南木挽丁　榎並屋作兵衛

伏見屋辰藏
紙屋喜兵衛
北木挽丁　河内屋次兵衛
鹽屋伊介
天ま　淡路屋太郎介
南久ほうし丁　小山忠兵衛
同三　大黑屋伊兵衛
和泉屋太郎兵衛
天ま　丹波屋平右衛門
長ほり　松葉屋新介
天ま　綿屋彌兵衛
本二　柏屋次兵衛
京町ほり　備前屋德兵衛
順慶丁　奈良屋善兵衛
中之島　豐村新六
道修丁　平野屋作兵衛

堂島京屋宗吉
近江屋彌介
大川丁加島屋藤七
ほりへざこ屋權兵衛
境すし和泉屋嘉平次
天まひのうへ福田屋太右衛門
久太郎丁河内屋六兵衛
同　錢屋長左衛門
鹽町平野屋五郎兵衛
鹽丁錢屋太兵衛
錦丁大和屋藤兵衛
北濱大黒屋七郎兵衛
大和屋庄藏
伏見屋半七
天王寺屋清八
鴻池清兵衛
長岡屋八郎兵衛
立賣堀近江屋權兵衛
天ま樋のうへ今宮屋藤介
釣鐘丁島屋九郎兵衛
本三布屋萬介
米屋丁近江屋半兵衛
西よこ堀備前屋彌兵衛
錦丁河内屋平右衛門
同米屋孫兵衛
内淡路丁池田屋善八
天ま市のかハ茶屋六兵衛
桑名丁小西德十郎

〔編者曰ク原本此ノ所六行空白〕

一　十月三日　三弦(絃)名人鶴澤文造死

法號　令聞無終信士

船場鹽町住兒島屋と云

闇の礫云　鶴澤文藏

近代の元祖鶴澤文藏丈此人鶴澤友治丈門人にて幼年の頃より竹本義太夫芝居へ御出勤次第の上り目先三味の音色さのミ飛ぬけたと申程の事なけれど只何となく大きく音に品ゝ有てきれいに手は左右共に打揃ふた達者どこに一ツ申分なき大立者彈方はきつすいの西流なれ共才藝なれバ自己の流義を調合しての彈あんばいどふ聞ても希代の妙手殊ニ手を付る事奇妙にて其うへ歌の方にも委しきや全體地の間などにも哥の彈方まゝ有ていよ〳〵艶に何を聞ても穴といふ事なしおはつ德兵衛上の卷かゝりの道行の間門口へかゝる迄只夢共なくうつゝ共なき手の付あんばい自由な物也縫物の間のメリヤスひやうしぬけのゑた樣なる彈方は性根奥のサハリなども撥はなれの奇麗さ全體此人のサハリの切やうは誰も得合點いたさぬ一をつまらせて二のさえた所は三味線屋も不思義なとの事其外の彈かたチクリ返しから餘人のとは裏はら皆品を分ての一流似セとふても似セられぬすねた彈方

或人云おはつ德兵衛敎興寺の段にて

わがみちよつと針當て仕立やうを敎へてたもと突付られても里育チ知らぬ縫針手に取は今がお初といふ事を但しは知つての探りかと胸に針持斗りにて立途もわかぬ案じ顔

是より詞の閒のメリヤスひやうしを拔て救ひ撥多シ生得文藏の三弦(絃)に救ひ撥曾てなし然れども此場の閒に
すくひ撥を專らとするは都て女郎などは縫針の道に疎く手筒の女の縫ものは究めて救針にするゆへとぞ
文藏平生ニ云やう淨留理の詞の閒も三弦(絃)は彈心ニ而棹を握り居るもの也離せバ休メ握れハ彈也と心得べし
と也然るに國性爺後日合戰相生參宮に

〈伊勢の國ふとしき立て宮柱和光の塵のかやの家根千木のかたそぎ忝くも御惠ミふる雨の國土を潤す
ことくにて天照すおほん神とは申也相どのハたちからを

此文段のおほん神とは申也といふ三ツユリよりコハリへ掛る閒にてちよつと三弦(絃)を下に置事口傳とす　天
皇太神宮を心中にて遙拜せん爲也とそまた赤松圓心綠陣幕壇風の祈りの段ニ

〈踊り上り飛上ツて肝膽を碎ひて祈りける

此三重返しの閒息を詰たり左なくては肝膽を碎く一心の祈りに成らずといへり文藏の三弦(絃)にはかゝる祕傳
多し中にも祕曲の三幅對とするは凱陣紅葉の曲水用明天皇の鐘入　わん久ゆかりの十德物狂ひ
當時三弦(絃)の皮の緣を裁ざるは文藏出勤の節より仕初ムゆへに今も文藏張といふ　一名乞食張とも
浪華今八卦ニ云

竹本芝居の三絃に鶴澤文藏といへるあり淨るり三絃のどてんぜう扨人がらハ公家のおとし子か共見へ
姿詞にも三味せん引らしい事少もなく一入上手にぞ思ハるれ

〔編者曰ク原本此ノ所參行空白〕

一　四月　長壽湯賣弘御觸

江戸冥加屋ほうそう用ゆる藥大坂賣弘所　瓦町一丁目川崎屋八兵衛

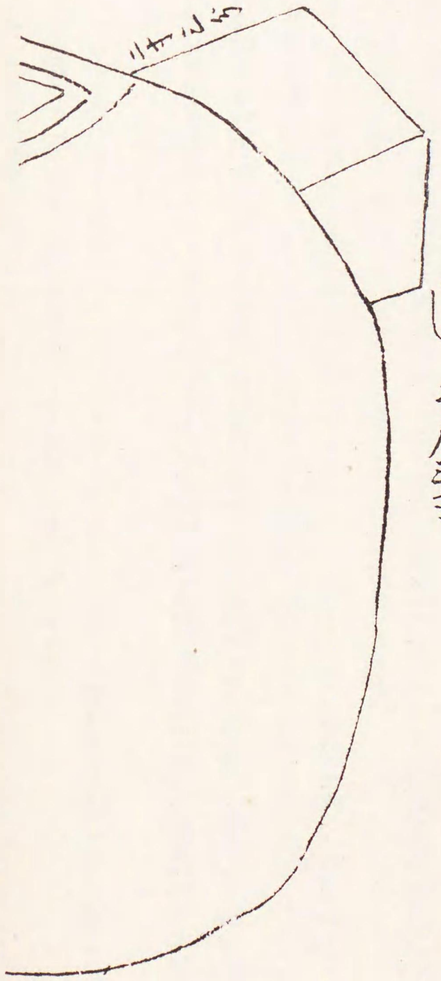
〔編者曰ク原本此ノ所壹行空白〕

一　文化元年子ノ秋ヲロシヤ船長崎へ着岸夫ニ付諸國騷々敷樣々の風說有之其節船場貸本屋俵屋
五兵衞和田文正堂上町伏見屋嘉兵衞右ヲロシヤ一件を寫本ニ致シ其義　公儀より御咎右之者
共三郷拂被仰付

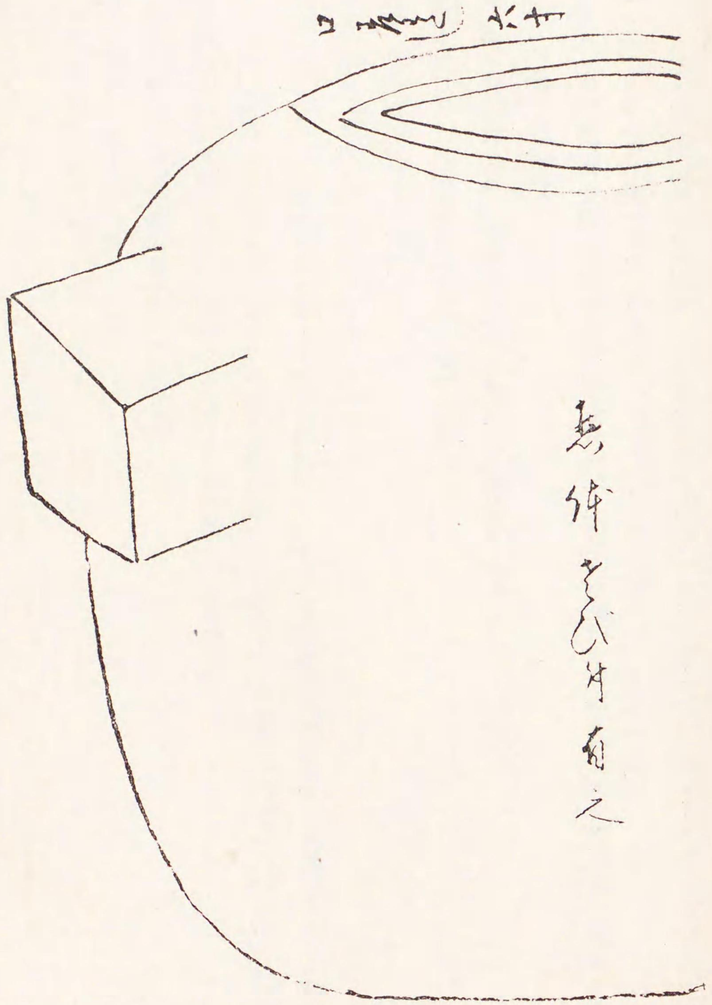
〔編者曰ク原本此ノ所壹行空白〕

一　九月　大坂本屋仲閒嚴重ニ相成無株之もの家業指留メ右はヲロシヤ一件寫本之事より書林仲
閒一統掟書株札等相改申ハ

一　五月廿四日堺戎町中濵吉仁所名西表仁兼主中ゟ
堀出し釜之図　都合廿二貫目



厚サ　五寸五分
高サ　九寸
横　五尺一寸
長　五尺二寸



無紋　外ニ紋有之

文化五　戊辰

一

一　正月八日　船場瓦町火

一　三月　江湖竹生島觀世音住吉ニ而開帳

數日霖雨ニ付參詣無之故北埜太融寺へ御所替有之ハ得共やハり不繁昌也

西國順禮せし輩も日和あしき日ハ湖上風波の難を怖レ遙拜のミして歸りしといふ人多し左あれハ觀世音みづから出開帳の時ニ逢へばせめて日參はなさず共一度ハ參詣有べきにかく所替迄ありても繁昌せざるハ信者も多キものにはあらざるか

一　三月廿八日　天王寺新始

一　四月三日より　同地築　幷地祭　同廿三日迄

一　同月　あみだ池ニ而信州善光寺本願上人御名號　諸人尊敬ス

一　同月　澤上江（カスガエ）村白牛

此牛は一昨年寅の秋伯劔に出生せしを澤上江村百性上田與一右衞門求め得て養ふ大キサ常體眼は朝毎ニ横へ長ク晝午之刻は丸く眼中に一文字あり角（ツノ）の筋は前ニ有やうに見ゆる　常體の角の筋ハ横ニあり

上古ニ白雉出たるを吉瑞也とて年號を白雉と改元あり孝子の德には白キ烏も世ニ出し例ありていづれ

聖代の嘉瑞なるべし

一　六月中旬　島之内八幡社小宮正遷宮　造り物夥し奥ニ記ス

同　十七日　十八日　歌舞妓役者神輿太鼓出ル見物大羣集

一　十一月廿日　北濱火

大川町淀屋橋西宿屋の二階より出火梶木町今はし筋東はせんだんノ木橋筋迄燒ル

一　二月二日　狂言作者竝木五瓶　東武ニ而死去

彩嶽英藻信士

天王寺西門納骨堂の側ニ墓あり

一　六月十六日　若女形藤川友吉死　行年五十歳

〔編者曰ク原本此ノ所壹行空白〕

一　十月九日　市川團藏死　行年六十四歳

釋了西

下寺町遊行寺ニ墓あり千日竹林寺にもあり

けふも夢寐てもおきても夢の夢夢の夢見る夢の世の中

一　五月　島之内三津八幡宮末社正遷宮造りもの幷ニねりもの、次第

回廊　八幡筋
鯨　炭屋町
孔雀　三ッ寺筋
灰吹より龍　なんハ橋筋
時計　八幡筋
ミの鶴　さのやはし筋
御幣　大寶寺町御堂すじ
水犬　なんハ橋筋
あやめ　大ほうし丁
宮入こま　三ッ寺すし
大佛柱　同
鳥つくし　同
松たけ　大ほうし丁御堂筋
猫　八まんすじ
蟬　三ッ寺すし
蘇鐵　戎はし北詰

蜃氣樓　炭屋町
ウハバミ　なんは橋すし
鹿　同
樂器　八まんすし
音呼鳥　三ッ寺すし
尾長鳥　同
鶴　同
飛鶴　同
山雀　同
連雀　松原丁
雉子　三ッ寺町
牛　さのやはし筋
ハヂキ猿　なんバ橋すし
鼠　新やしき濱
海ぶね　八まんすし
蝙蝠　なんバ橋すし

高入道　三ッ寺すし
店つき　新やしき
きせる釣もの　御池橋
豐島釣もの　八まんすし
桐生こま　なんハ橋北詰
石ノこま　同
石ノ釣りもの　さのやはし
鶴　三ッ寺すし
相生こま　八まんすし
釘ふじ山　三ッ寺すし
蜂の巣　大ほうし丁
白鳥　三ッ寺すし
雨ニつばめ　同
金けい鳥　同
駝鳥　同
鳥つくし　疊屋町

狸　さのやはし筋
石の釣りもの　なんバはしすし
名古木　周防丁
石ノ釣もの　なんハはしすし
豐島釣花生　松原丁
臼の花生　周防丁
田原藤太　なんバはしすし
をしどり　三ッ寺すじ
鷹　同
鳳凰　同
盆石　炭や町
そてつ　同
團　なんハはしすし
かいる　戎はし下
烏　新やしき濱
灯燈釣がね　周防町

竹　馬　なんバはしすし
ハヂキ猿　八まんすし
犬　くそ　周防町
雷　なんハはしすし
石臼ねぶか　さのやはしすし
店　つき　新やしき
稲　荷　山　太左衞門はし北詰
孔雀茶屋　三ッ寺すし

一俄ねりもの　孔雀茶屋細工人

見附臺　松に小鳥

按摩とり　座頭　播源
千とり　蜑　大喜
宇寸とり　在所娘　伊與
すもふとり　關取　瓶鬼
ちぎやうとり　大名　堺宗
客とり　藝子　玉新

風車　なんハはしすし
狐　同
絲渡りこま　新やしき濱
相生こま　さのやはし筋
切籠　周防町
面箱　さのやはしすし
たばこ盆　三ッ寺すし

さうりとり　奴　鹽清
物とり　五右衞門　大萬
ふやくとり　仲居　かき德
ほつとり　太夫　縫四郎
身送り　禿　久吉

一歌舞妓役者太鼓ねりもの

たいこ打

中山よしを　片岡愛之介　中村歌六
嵐安次郎　嵐龜三郎　藤川勝次郎
同　舁方
市川市藏　中山小三郎　柴崎臺藏
中山文五郎　嵐璃三郎　嵐瀧右衞門
淺尾奥山　嵐猪三郎　桐の谷權十郎
世話人　三保木吉左衞門
中山富三郎　嵐吉三郎　三升德次郎
片岡仁左衞門

〔編者曰ク原本此ノ所七行空白〕

一　座摩正遷宮造もの

牛房　北久太郎町五丁目
やんま安土町
鳥井　(農)濃人はし
樂器　米や町西濱
油かす錢　東堀マガリ
回廊　西よこぼり
高燈籠　(農)濃人はし
龍同南
高燈籠　信濃はし
十露盤　北久太郎町五丁目
たばこの前　西よこ堀
鎧同
龜　瓦町一丁目
螢籠　西よこぼり
白牛同

鯉瀧上り　本町小路
竹馬　ゑなのはし
水鐵炮　西よこぼり
玉川鯉　座摩ノうら
梅生花　西よこぼり
龍　北久太郎町一丁目
船　座摩ノうら
だんおり　本町一丁目
鎧　南本町四丁目
木石燈籠　南久太濱
二見　鳥屋町
鶴　本町わたなべ
鷹　北久太渡邊
人魚　本一
杜若　南本五

へチマ同
造酒德利　本町三丁目
蜂ノ巣　南本四
切籠　上なんバ丁
福助　南本一
狸廿四孝　本一
長刀鉾　渡邊
生花　あわさ
狐つり　南久太一
玉ものまへ　唐物五
蜃氣樓　久太五
鎧同四
天拜山同
兜刀　南久太壹
切籠　鳥や町
善知鳥　北久太四

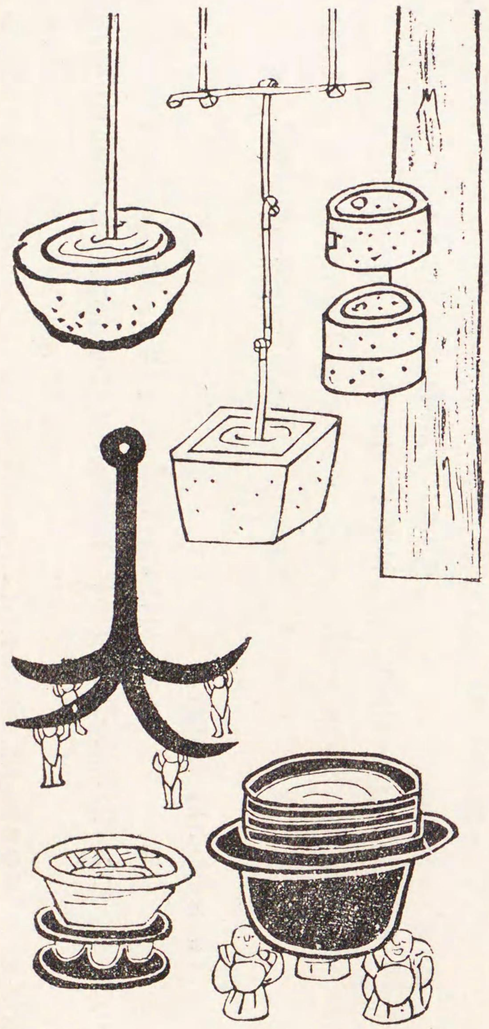
湖水渡　東ほりまがり
人魚　唐物三
浦島同
仙人　鳥や町
人魚　備後三
神功皇后　鳥屋町
天神　南本四
月鳥同
住吉踊　ゑなのはし
天神　東堀マガリ
鷺　瓦壹
御所車　南本三
蟬　鳥や町
伊賀壽太郎　北久太五
羽子板同
梅に鶯　唐物四

西行　南久太一
蜘蛛　久太四
淨るり見立　瓦二
はぎ狐　唐物二
時計　同
川骨　鳥や町
德利ノ鈴　南久太一
くちなわ　西よこぼり
ふね　瓦二
鹿　唐物四
大師櫻渡　同二
大佛柱　安土二
いすら梅うり　南本四
狸　北久太五
此外追々出來仕ゆへ共くだ〳〵しけれハ爰ニ略ス猶亦渡邊筋に人形數多出申ゆ亦々此節流行之釣りもの多し其荒增左ニ記ス

白牛　鳥屋町
道成寺　瓦一
島臺　同
芝居　西よこぼり
ふくさ小町　北久太五
かんたん　唐物四
玄能法師　同五
玉ものまへ　同五
茶店　本一
燒餅屋　南本三
水豹　北久太四
人魚　南本四
福介　北久太五

九六

石燈籠　南本四
ちやうちん　本心
へうたん　南本心
ぶどう　南久太
釣物祕傳云　關羽は八十二斤の青龍刀を輕々とつかひ辨慶は釣鐘を提げ楠は塀を釣り篠塚ハ大碇を擧る勇



繪本　南本一
座摩ノ紋　とりや町
ひやうたん　安土町

九七

力をあらわし石臼を箸てさすなとゝは聞しのミにて見しものもなきに今目前重きものを輕く釣り弱きに强きを持たせて諸人の目を驚かせり其荒増は

圖のごとく挽臼を柱に釣り煙管にて豐島の用水を釣り篠竹にて手水鉢を釣り大釜に水を入れて伏見人形に乘せる或は塗盆に玉子を乘セ其うへに摺鉢をのせるなどゝ種々の工夫各傳あり

〔編者曰ク原本此ノ所壹行空白〕

一　龜井町御靈社内寄進所ニ而

人魚　披露　催主　天滿　笹山氏

長　ケ　三尺三寸五分　　面ノ長サ　七寸五分　　頭ノ周リ　一尺六寸

胴ノ周リ　一尺八寸五分　　兩手長サ　二尺二分

世俗云　痘瘡ヲ輕カラシメ災難ヲ除キ咒詛ヲ祓ヒ壽ヲメ長カラシムト云々　畫帖ニ圖アリ

〔編者曰ク原本此ノ所半丁空白〕

一　大當不當見立勝負付

かち　まけ　　かち　まけ

座摩正遷宮　新川の筏乘り　高津おどけ開長　泉岳寺開帳

あミだ池ノ尼　喜光寺開長　石藥師砂持　四天王寺地築

三津八幡正遷宮　稻荷正迁宮　角丸ノ五右衞門　竹田自來也

友吉最期物語　關三最期物語　御靈ノ人魚　稻荷ノ人魚

角丸ノがんりう　竹田ノ孛源氏　谷村楯八　坂東重太郎

御靈うとふ　大西信仰記　大西うとふ　若太夫紙治

かしく寺妙見　北野天神正迁宮　三軒家ノ護摩　目神八幡正迁宮

鳥屋町石釣物　諸方石ノ釣物　法善寺土弓　法善寺ひやうたん鯰

稻荷ノ相馬太郎　座摩ノ柳吉　座摩ノ女力持　稻荷ノ珍物

高津天神正迁宮　法善寺珍木　泉屋堀抜キ井戸　天滿市之側堀ぬけん井戸

鳥盡ねり物　島之内ねりもの　役者みこし太鼓　俄囃子

市の側芝居　荒木芝居

〔編者曰ク原本此ノ所壹行空白〕

一　毎夜堀江ニゑん玉おでん柚ニ生姜をちよと掛たといふて賣歩行田樂屋流行

文化六　己巳

一

一　正月四日　堂島初相場

例年大川町淀屋橋ニ而米市初相場有之處去冬北濱燒失ニていまだ町家建揃ハず夫故堂島ニ而初市立

一　三月　東御堂南の土手三尺餘積上ケ奇石多くあつめて積たり　右ハ近々門跡樣御下向ニ付講中より御馳走の爲ニ致せしよし

一　同月　西口板木屋の手閉取女を殺シその首を提て西御番所へ名乘行

一　同月　西横堀五幸町大水道の傍ナル貯水の大釜鳴動ス

一　同月　立賣堀濱材木の上ニ而薩州の家士切腹ス子細相分らず

一　四月　天滿源八町紙すき屋某淀川の水中より大師の石像を得る諸人參詣羣集ス

一　五月廿六日より　大相撲　勸進元　朝日山森右衞門

今年角力大繁昌小家も是迄より廣ク致ス木戸口ニ進物之積もの米俵大幟之類ひ夥しく景氣見事也

進物之目祿(錄)ハ書畫帖之内ニあり

一　同月　角之芝居ニ而竹本義太夫百回忌追善淨留理興行

一　六月　高津新地御藏跡ニ而夕涼み

一　七月十日　淀川筋高水　天滿橋損ズ

一　八月廿三日廿四日　兩日葭原墓所ニ而慶長以來往生人廿二萬餘人回向

一　同廿九日　葭島ニ而平戸の侍女敵打

一　九月三日　狂言作者辰岡萬作死　行年六十八歲

谷町筋海寶寺ニ墓あり

學海院湛誣日深信士

一　九月八日夜　新町火

阿波座蒸湯より出火九軒町不殘通り筋燒ル

一　船場堺筋久寶寺町邊の商家ニ猫鼠ニ乳房をあたへ我子のごとく育ルを諸人奇として見ニ行

一　三月九日　立役尾上鯉三郎死

法號

一　有馬火

〔編者曰ク原本此ノ所壹行空白〕

一　サヽよし〳〵と諷ふ哥流行

一　六月　堀江ねり物

茨木屋
茶屋
茨木屋
茶屋
茶屋
茶

新刻

和名圖彙

見附臺　春日大華表

見送り　送りもの一目千本

五緒車　櫻の立木

一　六月　相撲取九十六（イチジク）喧嘩　西方前頭　大關より四十五枚目　〔編者曰ク原本此ノ所壹行空白〕

東方

關脇　玉垣額之介　中ノ三　石火矢庄吉　一文字吉五郎

西方

棚　文吉　駒嵐卯之介

大關　柏戸宗五郎　關脇鬼面山與一右衞門　前頭一荒馬源彌

中之三　柏木平吉　鹿子木辰之介

日本橋通壹丁目宿屋へ九十六參り刃傷ニ及び大騷動竹田芝居ニ而一夜付ケの新狂言ニ出ス　〔編者曰ク原本此ノ所參行空白〕

文化七　庚午

一

一　四月五日より　住吉正遷宮　五月二日迄　諸方寄進物夥シ

一　同月　難波橋北詰ニ而實綿市場御免

一　同月　寺社ノ名目ニ而取退キ講停止仰付らるゝ

一　同月　一心寺茶臼山邊ノ庵ニ而小僧切腹

中之芝居ニて御堂前敵打の狂言ニ取組

一　六月　花火會停止

一　當夏　勸進相撲　花湊嘉右衞門

中すまふの組合出ス

一　當秋　住吉大踊　八十年餘中絶今年再興

一　八月十四日　今日鶴天上して毒氣降るといひ傳えて諸人往來止ム

一　同　廿三日　狂言作者　近松德三死　行年六十歳

一如院亮體日相信士

一　同　廿六日　若女形　芳澤あやめ死　行年五十六歳

芳岸院巴紅日統信士

辭世　魂棚へけふやのほりて初ふたい

一十月　新綿番船切出シの勝負嚴敷停止仰付られ入牢多し

一當冬　道頓堀歌舞妓兩芝居顔見世興行無之大ひニ不景氣也

冬枯に裸矢倉の寒さ哉　相坂住　雪窻

一當冬　紙の頭巾はやる

一　はくろう町稲荷神主死　世ニ爪長といひふらす才子也

一　淨瑠璃曲語り大伊軒死

船場上人町ニ住シ芋商人平常篤實の人也二王がたり桶語り烟草がたり其外さまゞの曲語りを仕初ム音曲の金太郎也

一からのナア唐人の寐言にはといふ歌流行

一當春　道頓堀ニ而高野山女中案内といふ大からくり興行　細工人　竹田縫之助

〔編者曰ク原本此ノ所壹行空白〕

一十月　四天王寺五重大塔再建勸化之儀ニ付於江戸表　故障之一件

高家越前守嫡子

高家六角主殿頭

名代　依田平左衞門

其方義深川法禪寺事攝劦四天王寺五重塔再建勸化願添翰無之脇坂中務太輔へ差出度趣同人家來武井政藏再應差出ゟ迚請取置其後同人申に任せ法禪寺へ立寄ゟ所勸化ニ付中務太輔より町奉行へ聲掛之義法禪寺申聞ゟを書面ニ致シ可差越旨及答ゟ段中務太輔ニは近き間柄之事ニゟ得共右體之義は猶更相愼ミ取扱申間敷ゟ所其心氣も無之猥ニ法禪寺へ相越ゟ義は勤柄與申旁不束之至ニゟ依之御役　御免差扣へ仰付ゟ

右植村駿河守役宅ニ於て若年寄烈座同人へ申被渡也大目附桑原遠江守御目附安藤彈正少弼立會ニ相成且御切米召放寄合席ニ被　仰付ゟ事

若年寄　堀田攝津守

御側御用取次　高井飛彈守

御書院番頭　室賀山城守

右家來へ仕置ニ付差扣御伺被成ゟ所不及其義旨翌晦日被仰付ゟ

午十一月廿九日

輕追放　深川淨土宗　法禪寺靈俊

存命なれハ遠島　日本橋西川岸元林肥後守家來　山中藤兵衞

中追放　御書院番頭　室賀山城守家來　吉田三八

江戸拂　六角主殿頭家來　武井政藏

中追放　堀田攝津守家來　原田三輔

入墨輕追放　新右衞門町　嘉吉

百日押込　高井飛驒守家來　平岩鄕介

同　斷　四天王寺靜心院　善順

無構　寄合杉浦富之介家來　山田友八

兩寺役僧仕置ニ付立會出席

増上寺役者　上野　在觀　常照院

右於松平右京之助役宅ニ同人申渡之

午十一月廿九日

一十一月一日晝七ツ時過キ　御堂筋出火

御堂筋瓦町北へ入東かわ桐下駄屋より出火ニ而瓦町すし御靈筋迄兩側燒ル此日右桐下駄屋ニ七ツ時葬送有之其跡ニて召使ひの丁兒二階へ放火致せしよし

一六月　北の新地ねりもの

見附臺　天浮橋

先囃子　雲にかけはし　禿　姿

鴈金　おぶん　伊丹八十　ミき

雷　おせう　同　梅野

案ノ　おやす　伊丹屋　ひな鶴

極印　おせん　明石屋　いを

布袋　お市　扇里　うの

仲居　お竹　吉田屋　小かう

跡はやし　石橋

文化八　辛未

一

一　三月　生玉ニ而京東寺弘法大師開長

一　同月　道頓堀ニ而熊子犬見せる樣々の藝あり

一　同　同所ニ而三歳の德利子　みせる

一　六月　難波新地夕涼ニ而橘菊丸といふ鞠の上手種々の曲まりを蹴て諸人の目を驚かし大當り

其後天滿天神社内ニ而も大當り

一　八月　彗星出ル

一　同　二日　天王寺太子殿手斧始

一　十月十五日　文珠堂上棟

一　十一月八日　同　御遷佛

一　顏似セ物眞似聲色ノ名人東淸七死

一　三月　呑龍おどけ開帳

呑龍は能辨(辯)にて觀音の詠歌に一風を出して呑龍ぶしとて諸人歸依なし享和中南都興福寺南圓堂建立の砌奈良の町家ニ專ら詠歌を唱ふ其後大坂の寺町ニ暫らく住職せしかど原來破戒無慙の放逸ゆへ寺を

開きて今年同氣相求ル坊主の族を集メ呑龍は天口と變名して自身におどけ緣記またはアホダラ經といへるものを戯作して北埜太融寺前ニ而おどけ開長を初め其後所々ニ而も興行ス文政中難波新地ニ曉月山西方寺勸進所を建て說法を始ム

佛說阿保多羅經

婆訶那國道呂法師譯

女郎かいふ。ろくこのこうちゃくぜんこのぐこのこと。ようこうこう
ろう。そだからが。ようこの。ふべんなりや。ようこいをふぜ。こうや。いとんをふ。こう
なりや。ぜんぜうこうみ。ぜまこ。ひや。ぜのぐこいい。ぜんぜんぜんぜうだい
どうぜんぜまこうらだんく。こうし。こだのせ。ぜや。ちうさせ。ぜにいぜ。ぜうちうふ
どんひつけ。ちぜいうけ。ぜこ。ぜんこみ。ぜこ。ぜんこのあ。ぜいちろ。ぜこ。ぜう
ひき。ぜろぜし。て。ぜまこ。ぜや。けんこ。ぜこ。ぜうろんこ。ぜんぜまこ。ぜうこ。ぜこ。ぜだち
が。ぜこ。ぜや。ぜ。ぜこ。ぜう。ぜこ。ぜう。ぜこ。ぜだいこ。ぜこ。ぜいこ。ぜ。ぜんふんぜんふん
つこ。ぜこ。ぜうこ。ぜうけんぜんぜ。ぜんぜ。ぜや。ぜんぜ。ぜこ。ぜうこ。ぜうこ。ぜうこ。ぜうこ。ぜこ。ぜこ。ぜ

佛説阿保多羅経

狂作　天口齋　編撰

一　ばくろう町稲荷境内あやつり芝居文樂小屋興行始　年々不絶相續して繁昌ス

一　畫噺流行　開發人浪花一九　畫咄百の笑といふ出板

一一八

文化九　壬申

一

一　正月廿四日廿五日　兩日　天滿天神社內ニ而鷽更之守り出ス

鷽　更　之　記

此うそがへの事ハ九州太宰府の於天神例年正月に此事あり則うそがへの神叟となづく是を受得て其年の吉兆を招くことにぞありけるされバうそはまこと、かはりわさハひの幸ひと成り願ふ事の叶ひ思ふことのなる待人の來り惡き緣はよき緣とむすひかハるすべてあしき事ハ此鷽とりのうそとなりてよきことにかハる爰ヲ以てうそかへと云々また雷除の靈場ニて是を所持する家にはけつして雷の落る事なき

例年弘めん
思ひたちも
此春斗りこ
て止たり

一

し則菅神の託宣にして於宰府人のゑる所なれハよのつねのもてあそひものにあらず信べし尊むべしと
りわけ商ひ繁昌交易利潤を祈るものハうちこぞつて年毎ニ是を受る事也かゝるめてたきものもゑらぬ
火の筑紫のはての遠けれハ今や難波津の梅の花さく神の廣前に猶幾春秋の末かけて弘め侍るもの也

一　正月八日　天王寺境内へ北辰妙見宮御遷座

一　同　廿八日　講堂御入佛

一　二月一日　藥師堂御入佛

一　同　三日　萬塔院御入佛

一　同　五日　六時堂御入佛

一　同　十五日より　太子殿石築　同廿二日迄

一　同　廿六日　五重大塔手斧始

一　同　廿八日　同　九輪鑄始

一　二月五日　かぶき敵役　嵐三八死

〔編者曰ク原本此ノ所壹行空白〕

一　二月　湯鮒の珍事

西天滿猶村やしき風呂屋の湯壺ニ鮒ありて水中のごとくたぎりし湯を厭ハず遊ふ諸人見物蝟集ス先ニ井戸へ鮒を放し入しが湯壺の水を汲入し時釣瓶に入てあがりしか湯の中ニて自然と育てり……原本此ノ所以上ノ書入レアリ……

一　三月三日より　北埜太融寺ニ而河内上太子開長

一　同　廿五日　天王寺大塔九輪假建

一　同　廿八日　金堂上棟

一　四月一日より　諸堂開帳　十四日迄

右開長中太子殿北の門の蝦蟆股猫の彫もの世俗いひ傳ふ左り甚五郎の作にて往古は毎年正月元朝には此ほりもの自然と聲を發とて諸人奇として此門を猫の門と呼ぶこの猫を參詣の諸人擧て拜スゆへ世話人の頓智にや鼠のまじなひ也とて猫の陶を十二銅宛にて與ふ

一　四月十五日　戎名供養

一　同　廿二日　二王門上棟

一　四月　德本上人勝尾寺より南紀へ行

一　同月　瑞光寺鯨之橋再興

一　同月　雜喉場ニ而イルカといふ魚を取ル

一　五月十一日　天王寺二王門兩階子屋上棟

一　同　廿三日　二王門入佛

四

五

一　同　廿四日　十六羅漢入佛
一　同　日より　同供養　三十日迄
一　同　廿八日　御家流雅道家二代目　菊川季藏死
　　法號　道山居士
一　六月一日　天王寺戒名供養
一　同　月　角之芝居ニ而四天王寺鼓樓一宇寄進之爲三七日之間かぶき芝居興行之處大暑ニ付十日餘りにて止ム
一　同　角之芝居おどけ練りもの出ス　番付奥ニあり
一　七月十一日　行司木村玉之助死　一心寺ニ墓アリ
一　同　廿八日　天王寺十五社上棟
一　同　月　五重大塔疊石の中より石櫃ニ金龍の頭ニ佛舍利籠メあるを掘出ス佛法繁昌の靈驗也とて三日の閒諸人ニ拜ませ佛緣を結バせて後また〳〵疊石の中へ埋み新たに疊石成就ス
一　八月一日より　勝曼愛染堂家根替入佛
一　同　二日　東北囘廊上棟
一　同　十日　十五社拜殿上棟
一　同　十五日より　南唐門地つき　廿一日迄

一　同　廿二日より　十五社正迁宮　九月一日迄
一　九月十日　東囘廊上棟
一　十月五日　五重大塔柱建
一　同　十三日　太鼓樓上棟
一　同　日　鐘鼓樓假釣り
一　同　十七日　御宮正面築地上棟
一　同　日　東ノ鐘假堂へ引移
一　同　日　御宮北手築地上棟
一　同　廿五日　御殿鐘樓へ引移上棟
一　十一月八日　元三大師入佛
一　同　十一日　大塔初式
一　同　廿五日　御宮拜殿上棟
一　十二月一日　西鐘樓上棟
一　八月廿六日　若女形三升德次郎死　行年六十五歳

〔編者曰ク原本此ノ所壹行空白〕

先行花

先手

花映日

長柴ちる

日よりくまして

色もうつく

花衣

ワキ

雜居衆

和奇題

太鼓　イ子や　孫

ちびや　と　ま

立花や　せし女

三弦　大きな　撥こ女

笛　まちびや　六三郎

井つぐやちごとり

仝

こやこ井

臺子

田家辰

養委婦

祖父

古渓

石橋

ちちぶや　ちかけし

仝　砂糖左文

仝　七三郎

丁子や　長山太文

侍

岩花底

京町の書

侍

日与志

懐旧

志ちるや　おや羽

仝　源里左文

仝　さとの

仝　菓子屋

恵び屋　いちこ

仝　千寿左文

顔上雲源
富士太觀　表作

思往事
見猪太郎

同　則藤太夫

同　うせつ

同　宮井太夫

小夜衣太夫

東の吉松座
西の大坂座

社頭祝

押　座敷

千鶴美恵

文化九申年

一七月　坂　江踊

泰平踊風流

標題東籬佳節

師燈の龍　延年意匠

花の雲うつる海さの秋

壽宮凝粧

五節の舞姫

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

五音調子部物語

梁の塵も動かすべき

水龍萬象楽可

一六

〔編者曰ク原本此ノ所四行空白〕

一　石切俗俳　俄古敷　寛文十四五日七月の頃四天王寺上ヶ物番付

俄古敷　雅子番付

採類　文　木集

見附臺

岩戸山あまの　梁塵秘抄　國風俗歌

せなりの岩戸　虎　芳三郎

花の袞と　叶　八十二郎

ますらを　虎　保吉郎

ますらを風　人　浅尾與吉郎

一七

[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]　[illegible]
太敲　九右衛門　二右八
鉦　[illegible]　[illegible]右八
三法　利[illegible]　[illegible]右八
[illegible]

法
樂
敲　猪兵衛右八
大方敲　雲八
簫　[illegible]
草藁　[illegible]
[illegible]　[illegible]

小東流
大門山
見きく

清士

嵐　石三帝
中山百花
嵐　猪三帝
嵐　尾奥山
嵐　冠十帝
嵐　虫八
紫　吟長義
中山来左帝
相坐谷柱十帝

世法方
中山野水帝
叶　嵐子

明の力ふ
懐かく
石馬長
沃嵐帝三
嵐岩十帝

芝　乗
帝の川渓義

四辻門
柳川幸西帝

嘆きまきの
彼岸橋
三井十西帝

高野かふ
ものの
二王門
阪東國左門
嵐尾奥左門

あの
むかしの人を
ゆき市と
二股竹
沢村徳三帝

紙　五宝塔　坂東岩斎
紙子　坂東清彩
弦嘲子
右鞍　中山新吉斎　中村新吉斎
鞍　山下定義　芳沢小慧
頂戴の　中村新吉斎
四治　梅川大吉
三法

叶千鶴萬葉楽

紙　羽川房吉
笛　三井福吉
為三郎
政吉
竹三郎
暁治郎

文化十　癸酉

一

一　正月九日　大坂川々凍ル

一　當春　中の芝居二の替り中村歌右衞門七變化所作事大當り　慣ちよつと七化

一　正月八日　天王寺熊野宮御遷宮

一　同　十日　大塔二重目上棟

一　同　廿三日　大塔眞柱建ツギ

一　同　廿二日　三寶荒神上棟遷宮

一　同　廿六日　御宮賺高塀上棟

一　二月一日　御殿井戸家形上棟

一　二月十日　御殿北ノ門上棟

一　同　十三日　虛空藏入佛

一　同　廿五日　大塔三重目上棟

一　三月三日より　北埜大融寺ニ而美濃谷汲觀世音開長

一　同　五日　天王寺　御宮上棟

一　同　日　南唐門上棟

一　同　十一日　太子御殿上棟

一　同　日　同作合上棟　同拜殿上棟

一　同　十五日　法樂御式日

一　同　十六日より廿二日迄　御祈禱

一　同　十六日　朝かた　道頓堀火

竹田芝居むかひ東大庄より出火東は日本橋南迄西は中橋迄兩側燒ル

一　同　廿一日　天王寺寅ノ門上棟

一　同　廿八日　金堂御入佛

一　四月一日より　同御供養　三七日間

一　同　十五日　大塔四重目上棟

一　五月十日　猫ノ門上棟

一　同　廿八日　大塔五重上棟九輪上

一　五六月ノ比　北埜太融寺ノ前法性坊（世ニ曇色寺ト云）地内芭蕉に優曇華咲中風の藥也とて諸人所望して酒ニ玄たし呑ムまた見物も多し

一　當夏　難波新地夕涼み勢多宇治橋見せる諸見物橋を渡つて一興とす焼ケ餅を商ひ大當り

一　八月二日　天王寺大塔入佛

一　九月二日夜　道頓堀火

中の芝居前茶屋より出火東は太左衞門橋詰迄南は千日前角限り西は九郎右衞門町御堂筋辻より南へ燒ぬけ難波新地大半やける

一　九月　住吉大海神正遷宮幷開長

一　同月　角之芝居ニ而一世一代坂東彦三郎

眞猿祝詞姿名殘

右狂言首尾よく相勤メ江戸表へ歸ル

一　十月　天王寺舍利寺ニ櫻咲見事也　妙法さくらと云

一　同月　北野太融寺境内榎ノ木に南無の字あらいるゝとて諸人羣集ス

一　十一月二日夜　堂島中町火

一　同月　廿一日　淡太郎死

四天王寺伽藍再建世話人島之内白銀町淡路屋太郎兵衞といふ紙屑問屋行年五十四歳　翌廿二日八ツ時葬式天王寺へ送る　法號　本法院

天王寺境内回廊ニ木像ヲ安置ス

〔編者曰ク原本此ノ所貳行空白〕

一　今年も　揚弓大らうじの歌流行ス

此哥は天明の初めに專ら流行せしなり

文化十一　甲戌　二百年〔編者曰ク原本ニハ『二百年』ノ三字朱書〕

一

一　二月下旬　國分寺村氏神の神木ニ鶴の巣籠

一　三月十一日　天王寺太子殿正遷宮

一　四月　龜井町御靈社砂持大羣集

一　五月　元和戰死二百年忌法支一心寺ニ而修行

一　同　一心寺ニ林藤四郎吉忠墓新建

元和元年五月七日戰死二百年忌相當

玄明院殿光山舊露大居士

一　同月　戎島天神御旅所の神鏡ニ菅公の神影うつらせ給ふといひ觸し諸人參詣羣集ス

一　當夏　松江橋南詰燒跡明地ニ而夕涼み初ム茶店多く素人上るり講尺場其外見世ものあり

一　德本上人南紀より江戸へ下向

一　今年　日の丸鐵扇流行

これは當春中の芝居ニ而中村歌右衛門宮本無三四ノ役にて用ひしゆへ男子は勿論遊里の婦人等專ら日の丸の扇子をつかふ

一　三月　久々知妙見宮開帳

狐の繪馬之事〔當社靈驗狐緣記〕

抑久々知妙見尊の利益著明き事ハ世の人普く知る所也茲ニ當社の繪馬堂ニ一面の古き繪馬あり其圖は機を
る傍に一女在て柱に張たる御札を取らんとするを衆人驚きミる體を畫けりこの繪馬に付て一ツの奇事あ
り予が緣家泉州堺絹屋町絹屋甚左衞門ハ代々絹をひさくを家產とせり然るに過し享保十六年此家にさよと
いへる下女あり用あつて同所南大工町妙慶寺へ行しに本堂の後ニ狐穴ありしを知らずして汚せしかバ其夜
よりいとはしたなく訇り或は機ものを斷截または家內を噪して不怪狂ひける衆人大に驚き加持祈禱などし
て心を盡せど更に其驗なくて三年を過しぬ爰に其頃當山の開基日昌上人は尊德の聞え有とて速に請ぜしか
バ上人懇に妙經を轉讀し給ひ妙見尊の御札を殘し歸り給ふ甚左衞門難有く思ひかの御札を家の內に張置一
心に妙見大士を念ぜしかハ忽さよ女苦悶頻りに御札を取放さんとするに餘の御札は紛々と地に落れ共上
人の與へ給ひし御札のミいかにすれ共取事あたハず阿呼と叫ひて絕入たり家內の者連忙めき急に扶て牀に
臥しむ漸して心地つき衆人に語りけるは我ハ是妙慶寺に栖る源左衞門といへる狐也然るに過し日此女が爲
に栖を汚され寃氣己がたくてかく惱す事三年也しに豈意哉上人の智德に縛られ妙見尊の靈劍を蒙んと
は故に惡念を翻し疾に善心に歸せんとす早く上人を招くべしといふ粤ニ於て或は大士の靈驗を感佩し或
は上人の大德をほめ皆欣んで上人を請するにぞ軈て上人いたり給ひさよ女の前に進ミ給へば頭を叩て罪を
わび筆硯を乞て過を悔るよしを書しに不思義なるかな此さよ女もとより文字は學びもせぬにさら〳〵と

認ぬ人々大に不審各試に紙を出して書を需るに尙不辭して書終りぬるしの心持にや五ツの指に墨をぬり名の下へ是を押に只三ツゆびの形顯れ畜類の證明白也斯てさよ女ハ其後何の障りもなけれど再び物書事與ハ(能)ざりし茲(コレ)は是予が緣家なれハ父の目下見(マノアタリ)しことにて疑ひもなき奇談なり豈(アニ)當社の奇瑞ならずや是を以て考るに神前の繪馬は此趣を畫て靈驗を顯したるならんかされど絹屋には曾て奉納せしことなけれハいかなる人の捧しやらん是も不審し然るに此繪馬歲久しく雨露のために損し看人も非ざれバかゝる靈驗も知る者なし是予が久しく悼む處也時なるかな今年當社開長の折に逢ぬれハ幸に是を修復して再び神前に掲け且源左衞門狐の書し誤證文幷ニ題目等絹屋より乞得て參詣の人に見せ當社の靈驗妙經の功力を記して諸人に施し同志の人益信心怠らざらんことを希のミ

文化十一甲戌年三月　　施主　大坂　葭屋仁兵衞

一

一　御靈宮砂持大羣集思ひ〳〵の趣向左ニ記ス

〔編者曰ク原本此ノ所四行空白〕

おわたり　二ツ蝶々
うかれはじめ住吉おとり　ほてい
魚つくし龍宮　將棊の駒

羅漢　石橋
餅つくし　艸かり
角の芝居　朝がほ　淀辰金箱
越後おゝ　事ふれ
鳥つくし　三井でつち
牧がり　大名行列
大手筥瀨　芝翫七化
猩々　忠臣くらよめ入
かねがみさき　五人女
五人男　茶つミ
虎がり　忠臣藏夜うち
狐よめ入　子供仕立おんごく
太夫道中　ぬまつ津
千本ざくら　忠臣ぐら七ッ目
伊勢まいり　山入
安宅の關　迷ひ子さがし

五右衞門　狐行列
玉ものまへ　奴いか
豆藏　脊高三度
天神鏡のうつり　節分鬼
十日戎かご　猿ケ島
大津繪　よい男中
下女中　三番叟馬
がんりう　いわ井風呂
いせまいり　宇治はし
庄屋けん　唐まんぢう
海人　どちこ中
はだか中　天狗の鼻
ぴんづる　あほ次郎
壬生狂言　六齋念佛
坊主からふろ

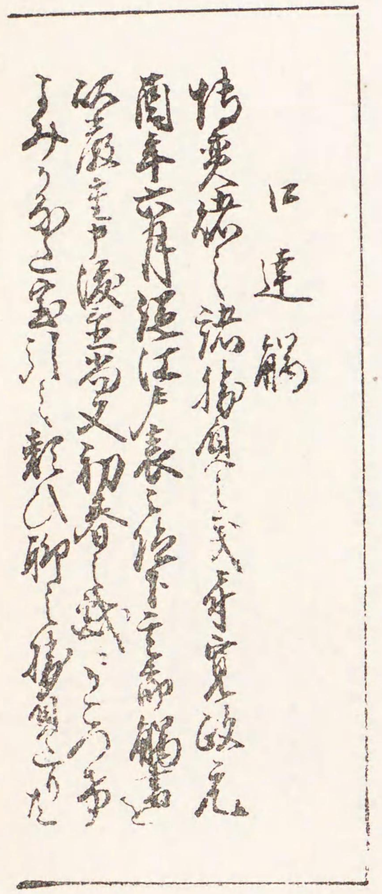
此外にも色々あれども略ス

文化十二　乙亥

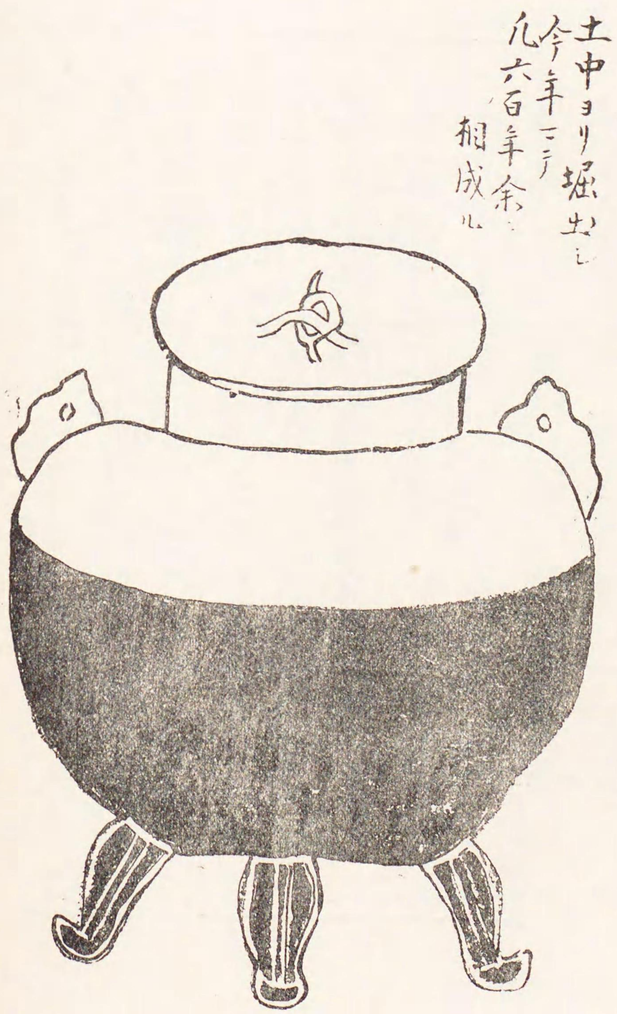
一

一　五月　龜井町御靈宮正遷宮
氏地に造りもの多く寄進物夥シ　番附畫帖ニあり

一　正月　博奕之張札



一　七月十五日より御靈宮社内ニ而披露
鳴釜煎内一文字釜貞呂ノ作



抑此茶釜之儀は人王八十五代後堀川院の御宇承久年中駿州志多郡大住村百姓何某石櫃に人土中よりほり出し銘を内一文字と名つけ永く其家に傳へれり其後文明年中に其沙汰京都へ聞え東山義政公ゟ高覽に備へり其節古老の目利ニ依てこれは鑄物師の名譽貞呂の作なるべしとて夫より内一文字釜貞呂の作と申傳へり然る處百五十年ほど以前寛文年中より如此のふしぎあらわれ申ゥ

一　釜に水を入火にかけ煑立ゥへは蓋鳴り左右へ廻り申ゥそれより釜おろし置ゥ得は蓋吹付申ゥ蓋へ縄を付引上ケゥてもはなれ不申もつとも中に水有之ゥへども一向水音いたし不申ゥ

一　夫より釜を火にかけゥへは元のごとく蓋とれ申ゥ又々釜の湯をこほしから釜にいたしゥても煑立ゥ通にふたなり申ゥ釜おろし置湯さめ水に成りゥても煑おとといたし申ゥ尤蓋の鳴音にて晴雨の様子相知申ゥ其外ふしぎなる事共色々有之ゥ誠に古今珍らしき器物ゆへ此度　御當地ゟ罷登奉入御覽ゥ御見物之上御評判奉希上ゥ以上

一　御靈宮正遷宮造り物

羽衣	カイヤ町	材木	卅三間堂濱丁
糀ぶた高燈籠	同丁	茶道具住	吉安土町
香道具	氣樓安土町	米道具天	狗京町堀

〔編者曰ク原本此ノ所壹行空白〕

ふしん場
乘物　カイヤ町
花足
金鶏鳥
佛だん
鎧
醤油屋
よろひ　瓦町渡邊
大
造酒徳利　京町堀二丁目
竹
大皮　鷲道修町
焼もの
孔雀　佛後町
三味せん
竹　馬淀屋はし
塗道具
八幡太郎渡邊
女中道具
遊山船　京町堀三丁目
豐島石
生花　カゴヤ丁
店道具
越後獅子本町
塗箸
ゐの　ふゝ　常安はし
ゐ　高らいはし
かみ
なり

南艸入
印鶏安土町
灯燈かハ
具足常安町
酒道具
花車佛後町
呉服もの
盆石安土町
竹
大皮　鷲井池
帛細工
大つる江戸ほり
三味せん
竹馬常安はし
塗道具
神樂かハら町
馬具
猩々カイヤ町
左官道具
灰吹より蛇　カゴヤ町
茶道具
ひやうたん駒　越中はし
同
灯燈　カイヤ町
越後おゝ　淡路丁
錢さし
神馬京町堀

綿道具
西行渡邊
米はしり踏京町堀
鏡石臺橋渡邊
そろべん
反橋かハら町
茶道具
少將淡路町
絲車
住吉踊　カイヤ町
とりばち
ひやうたん駒　呉服町
用水
烟草盆京町堀
いかき
ふくろ鳥高らいはし
桶るい
竹馬籠や町
金もの
童子牛　カイヤ町
折手本
住吉踊同
茶道具
おし鳥常安町
米屋
朝貝　カイヤ町

鹽うを
鶏京町堀
干物
石橋　カイヤ町
おしき
碁盤京町ほり
女道具
時計常安町
箸箱
反はし　カイヤ町
茶道具
綱渡常安はし
塗もの
御所車京町ほり
同
はじきさる　カイヤ町
用水
ちやうし鍋同
あみ笠
蟬同
桶るい
竹馬　カイヤ町
藥研
車牛　羽子いたはし
紙屋だんぢり
茶道具
竹馬常安はし

燈心ノ白き物　狐　かハら町
干りこ　常安町
材木ハヂキ猿　濱　丁
筆細工ノ矢　カイヤ町
ちやくし蟻　カコヤ町
普請場朝貝　阿波殿はし
膳金燈籠　同
釘〆山生魚　かハら町
米屋こしさけ　カゴヤ町
草履牡丹　カイヤ町
瀬戸物鉢植　京町堀
酒鐘袋　馳備後町
傘　道よとやはし
牛若道修町

米屋艾うり　江戸ほり
合羽天狗　よどやはし
干物水車　江戸ほり
コンクワイ　御靈まへ
砂糖盆石　カゴヤ町
西瓜（もうせん）　カイヤ町
角力矢倉　淡路町
扇風車　常安町
手水鉢風鈴　同
水入住吉踊　カゴヤ町
傘とんぼ　津むら
土藏釣釜　京町堀
遊山船燈籠　かハら町
紙細工天王寺　京町堀

白藏（からくり）　主　京町堀
同日光道中　かハら町
子供廻り燈籠　京町堀
水がらくり　江戸ほり
店つき　御靈すし
同　かハら町
同大佛　同
はじき鯛　七郎右衞門丁
影畫　淡路町
人形白いもじ　かハら町
女形茶店　なべや町

右之外數多有之共略ス

〔編者曰ク原本此ノ所半丁餘空白〕

一　金山寛齋　切紙之寫

去程に當春より切紙を以て相知シハ通り男女ともに獄道之筋ニ立入ハ衆中ハ二度跡戻り不致やうニ直シ可進旨申弘メハ處聞付次第追々餘分ニ相成ハ而俄ニ宅替致シハ都而何ニ不寄獄道之心ニ相成ハ人々抔は皆了簡違より相初り勿論親兄之禮を不顧其上金銀之難有事を不存剩大切なる家業を二段ニして我々が好物ニ心をよせ勝手次第之我儘者某へ壹度面會いたしハハヽ百人ニ壹人も不用者なし猶又某儀は大坂逗留中入用ハ國元より持參ニ而一切人々之御世話ニ不相成既ニ是迄も右獄道相直りハ人々親々抔

大悅之餘り少々ツヽ之禮物等御持參有之ゟへ共一切受納不致ゟ但し獄道のミにあらず都而親類他人ニ不拘不中なる族御座ゟハヾ直シ可進ゟ是迄數十軒和順ニ致シ進しゟ得共禮物ハ一切受納不致ゟ右二色共ニ御賴被成度人ハ一兩日前ニ樣子を聞御出可被成ゟ猶又大言過言ニゟ得共むかしより此大坂ニ箇樣之ちらし相弘メゟ者なし某も一兩年之内ニ國元へ罷歸りゟが二度箇樣之者大坂へ參りゟ共存不申然ハ大家たりとも家々之かきんニ不相成書夜共ニ不苦誠ニ聞たるハ一旦不聞ハ末代と申事是也

南ほり江りうへいばし南詰少シ西へ入北がハ門前ニ表札有

亥　八　月　　行年六十五歳　金山閑居寛齋

某義ハ神佛頂戴猶又身之行孝之德仍而取行ゟ故外々之隱居とハ相違御座ゟ

〔編者曰ク原本此ノ所六行空白〕

一　六月　新町俄囃子

文化十二乙亥夏六月

鷲難子番列

題　四孝之神祇

見附臺　華表

春日初

四四

負日禪

琴

三味線

四五

白
ハ
菖

龜

人
蒸

千秋萬歲樂

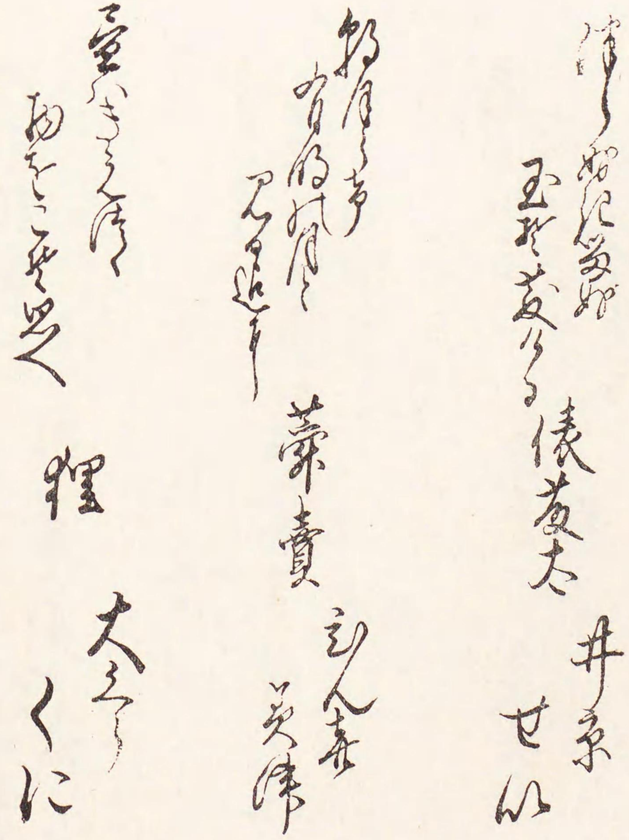
文化十二乙亥年　坂町

天満宮正遷坐俄遂物

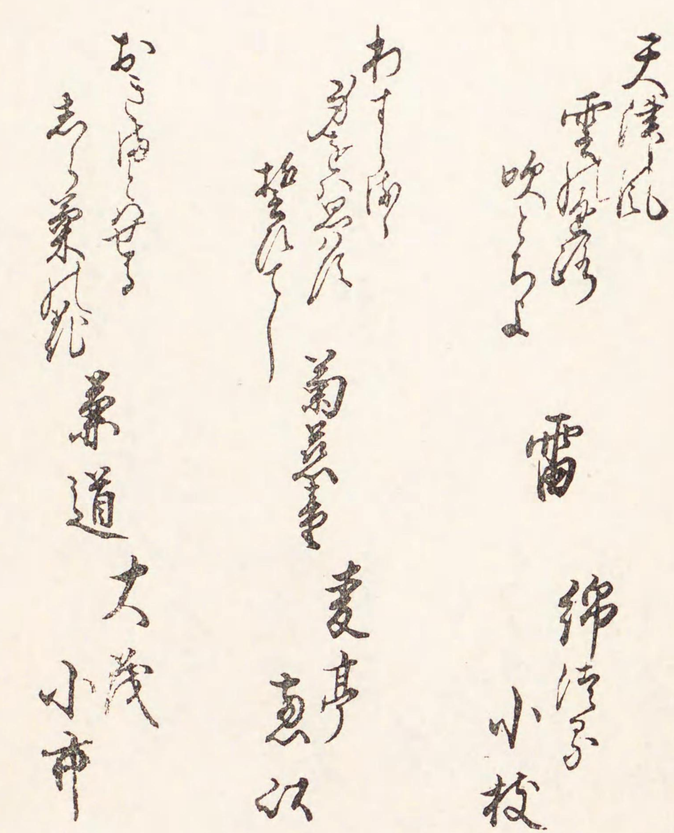
採題百人一首

見附臺

小倉山



五〇



五一

囃子

[illegible]

太鼓

鉦

三味線

笛

見送り　二人

一　十二月廿九日　濱芝居立役　百村友九郎死　行年五十六歳

法號　覺法了壽信士

藝道も一風を仕出し濱芝居狂言心中浮世噂ものなとの作の上手にて天明寛政の頃諸見物のヒイキ多き建者なりしが病身にて後々は出勤も難相成

文化十三　丙子

一

一　河州葛井寺より開運ノ守を出ス

併シ今年は先達而文化元甲子年のごとく諸人信せず

一　正月廿五日初夜頃　津村御坊太鼓樓火　御成御門も燒ル

一　住吉神樂所上棟

一　座摩宮神寶開扉

畫キ帶ニ錠嵐シたる所右繪馬を奉懸

ありとて惡說なすゆへ不日ニ取拂ふ

一　十二月廿九日　濱芝居立役　百村友九郎死　行年五十六歳

法號　覺法了壽信士

藝道も一風を仕出し濱芝居狂言心中浮世噂ものなとの作の上手にて天明寛政の頃諸見物のヒイキ多き建者なりしが病身にて後々は出勤も難相成

文化十三　丙子

一

一　河州葛井寺より開運ノ守を出ス

併シ今年は先達而文化元甲子年のごとく諸人信せず

一　正月廿五日初夜頃　津村御坊太鼓樓火　御成御門も燒ル

一　住吉神樂所上棟

一　座摩宮神寶開扉

一　ばくろう町稻荷社正遷宮

一　御靈社內朝吉大明神正迁宮

一　當春　天滿天神社內繪馬堂へ東武の婦女おのが姿を畫キ帶ニ錠蔵シたる所右繪馬を奉懸

京都北埜の聖廟にもあり

一　當夏　難波新地ニ而大瀧を見せる　高サ五丈一尺

讃州住人　籔與三右衞門工夫　畫帖ニ圖アリ

一　道頓堀角ノ芝居ノ角へ芝翫景員柱立ツ　文アリ略ス

河州の鄕士中村氏なる人の趣向なれ共ヒイキ柱に火柱の聞えありとて惡說なすゆへ不日ニ取拂ふ

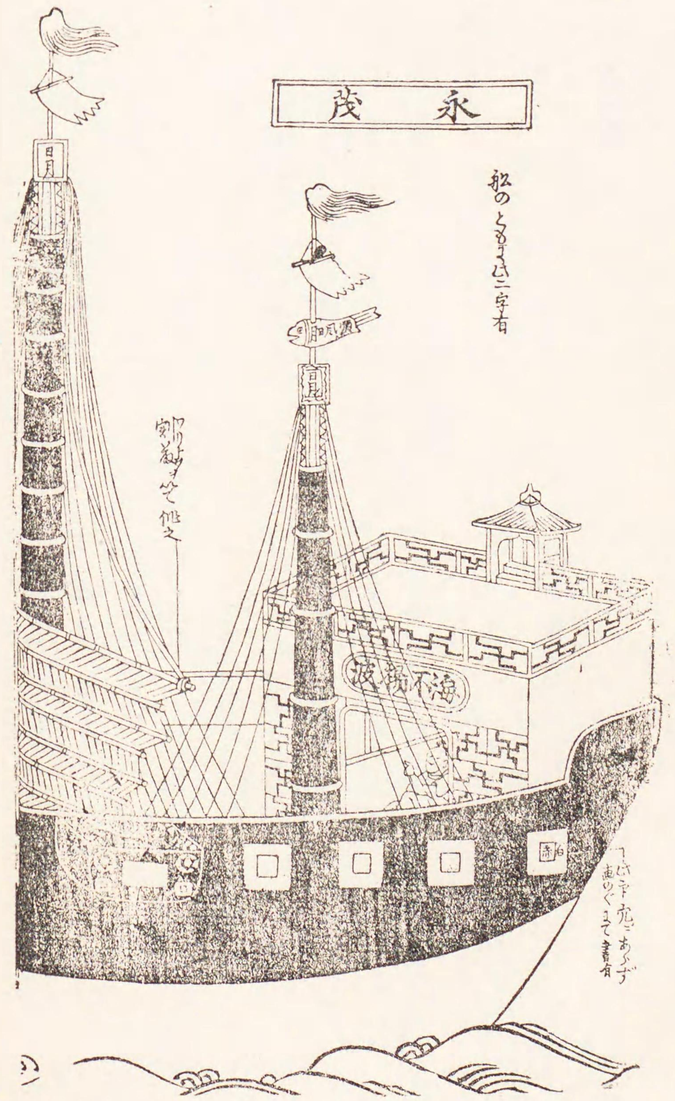
一　七月廿九日　長唄名人龜壽齋死　始　鈴木萬里
遊行寺ニ墓あり　廓法癸性信士

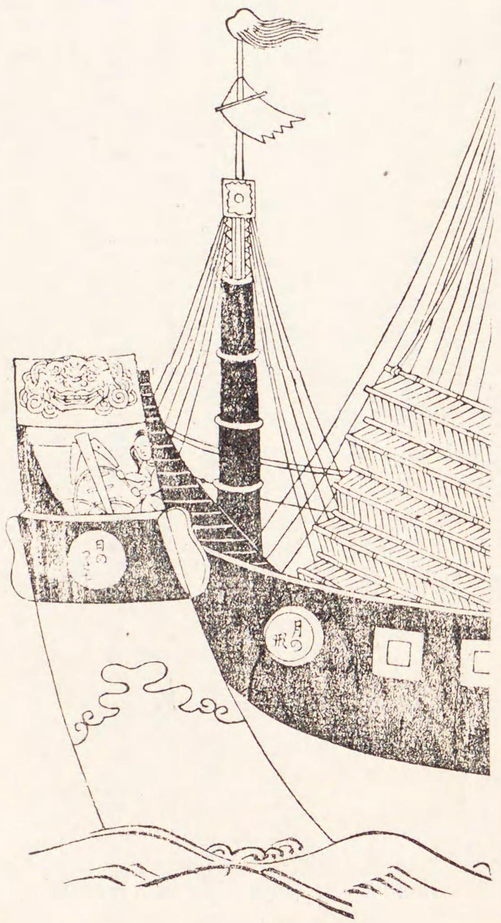
一　ニワカ名人　辨連死
辨連は俄ニ名高く　西本願寺門跡大坂下向之節其名を聞及ひ給ひ所望あつて俄ニ番つとむ生質廉直なる一奇人也

一　四月六日　永茂船入津
去亥年十二月大風ニ而南京の永茂船伊豆國下田の沖へ漂着なす夫より翌子三月志州鳥羽の沖へ廻り同四月六日申之刻攝州兵庫の湊へ入津ス船中異國人九十六人積荷物幷ニ永茂船の圖左ニ記ス

一　黄　茈　壹萬三千七百廿斤
一　檳榔子　壹萬三千九百斤
一　甘　艸　三萬四千五百五十斤
一　丸　藤　壹萬二千貳百斤
一　麻　黄　壹萬四千六百斤
一　貝　母　二百六十斤
一　甘　松　七千五百三十斤
一　白砂糖　十二萬千五百斤
一　丹　柄　千百斤
一　氷砂糖　五千斤
一　大腹皮　千九百四十斤
一　伽　羅　三萬廿目
一　黄　芩　壹萬千六百斤
一　潮　孫　九百四十斤
此外　藥種凡三十萬斤　書物帙數二千百七十帙

茶碗　藥　唐紙　丁子　筆　墨等數種有之


永茂
日月
波物不揚


日月

文化十四　丁丑

一

一　三月三日より　あみだ池ニ而上州千田稱念寺齒吹如來開長
先年明和四年に相替らず五十日ノ間諸人參詣羣集なし又は百度參りの立願する人多く蛤を食せず大坂の町中辻合ニ御影を祭りて百度參りをなす　（緣記ハ明和四ノ條ニ出ス）

一　當夏　投扇流行
難波新地野側を初め大坂の市中所々に會席を設ケて點式の勝劣を諍ふ事夥し四季の茶屋ニて大會有之ゆ節故障之義出來ニ付其後は次第ニ相止ゆへ共今ニ新町の通り筋難波新地などにまばらに席あり
明和の末安永初めの頃投扇會大きニ流行スといへども風流家の戯遊にして今年のごとく無雅の輩も翫ふにはあらじ

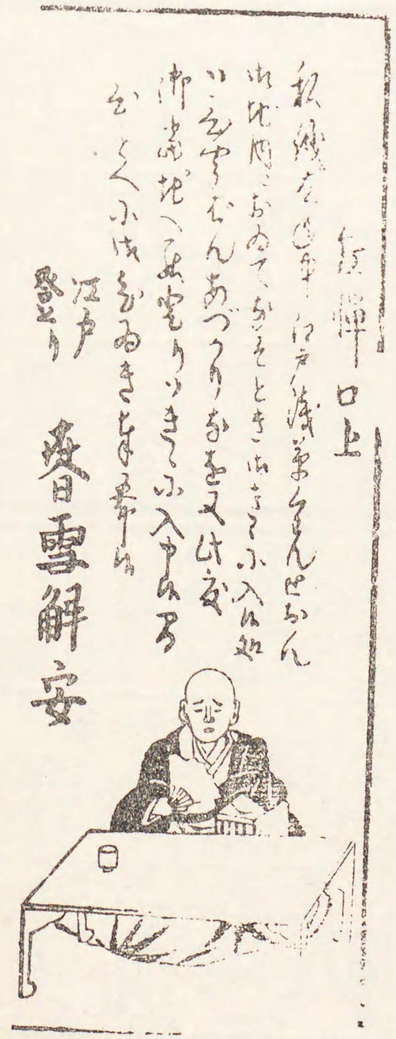
一　四月　齋藤町加島屋某之妻女（當時後家）不貞之義有之ニ付流罪

一　八月　天滿天神寄進芝居興行

一　天王寺寺町吉祥寺表門ニ磐ノ墻建　朝鮮金明旭銘アリ

一　三月廿一日　百尺樓桂雄死
法號　釋桂雄　行年四十八歳
まかつひのなすわさハひとつゐに行道とはかねてつらもはられす
ミなれ棹さほなくるまにつくときけハのらすはあらしのりのはや船

一　紀州表敵打の噂
攝河京師及ひ專ら虛說さま〳〵いひふらせり



ろんごよみろんごゝちゞとかけて
　よし原のけんくわととく
心へ　こうしへみじんだ

いしのまくらトかけて
　ふかいなじみトとく
心へ　いつもあいたい

嵐吉三郎が□□□□トかけて
　べつこうのくしこうがいトとく
心へ　女中が　□□□がる

むまの□□トかけて
　どうらくむすこトとく
心へ　手に　あまる

川なかのひるねトかけて
　ざとうのめうとトとく
心へ　みづに　ねる

きくのはなトかけて
　□□□のゝんぞうトとく
心へ　手をいれてさかせる

はるごまトかけて
　まうぞうトとく
心へ　ゆめに□□□□よいとや申

あの娘をもらいたいトかけて
　おちやづけをあがれトとく
心へ　いゝなづけがある

中村鶴助の道成寺トかけて
　忠臣藏五段めの與市兵衞トとく
心ハ　かねニうらみがござる

もめんいとトかけて
　小栗のはんぐわんトとく
心ハ　くるまからひきだす

かけたすゞりトかけて
　宇治川のせんじんトとく
心ハ　する墨がながれる

ひゑいざんトかけて
　ふまばらのあそびトとく
心ハ　おやまがたかい

なぞときほうずトかけて
　目がねのめきゝトとく
心ハ　かけてごろうじませ

天ぐの玉子トかけて
　あほうニつけるくすりトとく
心ハ　あつたら高かろう

うぐいすトかけて
　そうれいのともトとく
心ハ　むらにきてなく

さかづきのざしきトかけて
　やまばちトとく
心ハ　さゝれながらもおさへてみたい

見物思ひ〳〵になぞの難題を書記して渡せバ卽座に答へて一興とし見物羣集スもし此難題を解キ得ざる時に傘一本過料として進上せんといへ共いか樣の難題にてもこぢ付ケに解也此者江戸にて流行せし春雪にあらず實ものなるよしおかし難題を解ことは奇妙也初めて荒木芝居ニ而興行夫より座摩社内所々の涼ミ床にても勤る

元祖　花歌部屋

どんちゃん

淺草

春雪

あいされとうけて　△ものんのあづさ　●人ハ　みるたびあらこい

ものんちくとうけて　△ちくこうと　●人ハ　馬　ちんく

ゆくこ　ちりち　△ゆくこ　ちゆ　●人ハ　なりこ　ちんげる

ちくちゆ　ちちけ　△ちちけ　ちゆ　●人ハ　たびこちゆ　ちゆい

ちれ　こそりこ　ちけ　△ちけ　ちゆ　●人ハ　ちゆ　ちゆる

さこ　ちのこ　ちちく　△ちく　ちけ　●人ハ　ちゆ　ちゆ

ちなり　ちこ　ちこ　ちけ　△ちこ　ちゆ　●人ハ　ちゆ　ちゆ

ちのの　ちちけ　ちり　△ちり　ちけ　●人ハ　ちけれ　ちける

四角なる子とうて△かくしひげあるもの●ふハどさいハかくるもの
鶴亀とかけて△あかどころのみて●ふハ二日をさく
あかぶくれりんくるとて△さいたくるとて●ふハ生ぬさ花のいーかつろう
江戸子とうけて△初ろーまのなん●ふハおきまあつくる
五条代ハもちしだいとうけて△人ごみのこころ●ふハかつをだ花もたいたさぬきみ
井戸の中の火とうけて△ざとうはめんさ●ふハあよやける
南向の赤色とうけて△いーなげとく●ふハちうりうきさ
いさみの女とうけて△かくなるとくく●ふハあれハごろつく

美者の切つなぎとうけて△つみぐーのかち●ふハせのろくをつる
四十銭とうけて△青いとぜーチ位●ふハ江戸のえなぐさ
ぬくまんの乞ざとうけて△ちくい和ちくえん●ふハたれよも
ちくま西天人物とうけて△ちくあり分十年ちくり●ふハたくまぜ
ちくみ女とうけて△ふり山と　ちく●ふハ　しくある
ちくんぐ男とうけて△おちくく事物とく●ふハうむことがなくぬ
ちくまぜ生ちくあるとて△すこ四の和ちく知●ふハあるつげ事ちく
ふくさもとうけて△やけるとーの野戸●ふハかとまでごげる

文化年閒

一　牽牛花流行

文化七八年の頃より雅俗となく牽牛花を翫ふ事盛んに成行寛永の大菊元祿の百椿近くは寛政の橘に百倍ス各々異樣雜色數十種ありといへども黑あさがほ黃花は稀なるよしいへり愚考に

俳諧物見車ノ序云　元祿三年印本

こゝに誰たゝミ置とも知らす反古の中に俳諧の發句とおほしきもの一ツ見出ス槿に黃有白きありといふ七五の句也上の五文字ハ引さきたる跡はかりにてミえす思ふに是一曲の句ふり猶ミえぬ五文字のゆかしくて彼杜工部が詩の　林花著雨臙脂濕と云句の濕の字をむしばみしに東坡山谷少游佛印等が潤老嫩落と補ひし事を思ひ出て今時都に誰彼と名を知られたる人に五文字を置しむ

末の世や槿に黃あり白き有　似船
僧いかにあさかほに黃有白き有　常牧
時世かなあさかほに黃あり白き有　我黑
蝕の夜や槿に黃あり白きあり　晩山
當分は五もし置かね申ゆ　如泉
槿に黃なるは稀なり　言水

かくのごとく其心こと葉大きにかはるいづれを是としいづれを非とせんや是杜詩の句の濕字に各あたらざるかことくいよ〳〵まよひのひとつとはなれり

かゝる事を記したれハ天和貞享の頃牽牛花の流行せしにやあからずは黃花は今も稀なるに當初あるべきかあらずハ黃有白きありといふべからず近來朝貞を愛する人此等の考索ありや知らず

文化十四年丑ノ秋　浪花牽牛花珍藏家品目

金華山　鴻善　　金雀　加島久　　銀世界　油吉
渦孔雀　樋野　　龍田平軸　米平　　斑白柳　島九
武藏野　末吉　　八重咲　木内屋　　斑金龍　河幸
斑淺澤　下河原　　斑翠柳　茨吉　　雪燈籠　百足屋
衣紋重　堺七　　鳳凰葉　松吉　　白渦竹　勘
斑翠渦　きの國や　　陀羅葉　折や　　笙咲渦　加島藤
黃葉渦　三分屋　　斑渦　淀吉　　いたゝき　帝利
銀雀　泉平　　七小町　絆屋　　姫桔梗　西元
伊木里寸　桝伊　　黃葉柳　油嘉　　斑紺龍　綿政
斑紅臺孔雀　米杢　　斑南天葉　吹平　　斑翠絞渦　播仁
七福神　池孫　　光源氏　さか市　　古金襴　硯屋

斑紅柳　住嘉　斑紅臺　油利　白登龍　金屋
斑紅絞柳　千艸屋　鬼若　ひら仁　龍田嵐　にし山
斑紅柳　吉力　斑臺孔雀　加島作　翠登龍　はくト
大和錦　茨木屋　新八橋　室田　ムスコヒヤ　油次
黄葉谷細道　京平　舞孔雀　百々　秋篠龍田　島利
斑木立　嶋庄　舞の曲　河元　平軸嵐　加島重
白斑龍田　佐藤　龍膽孔雀　井筒屋　翁舞天　忠
井牛里　いせ伊　翁獅子　伊丹屋　白柳折　彌
虹臺　さこ三　鹿ノ子猿　海善　紅絞渦綿　鐵
斑鼠柳　加島安　四季ノ友　茅原　紅絞柳　高村
村雲　かき幸　兒櫻　小川屋　時雨龍田　了安寺
紺龍　昆布屋　錦亂獅子　竹伊　黄葉吉野川　油彦
防蘭　東嶽　黄葉白斑翠　桑田　翠笑渦　加島彌
翠絞柳　岡田屋　平軸　京七　雪月花　はら〳〵藥
都錦　木市　翠臺孔雀　茶碗屋　龍田川　光滿寺
紅亂獅子　河作　雪月臺　養老　雙龍　ナンバ峯岸

斑銀龍　中井　斑紅絞渦　伏辰　猩々伏七
紅登龍　奈良正　浮瀨　坪井屋　白山牡丹　炭五郎
斑翠笑渦　さつ善

此外年々に珍花出るといへ共事繁けれハ略之此頃或人の戯作せし朝貞萬歳といふ唱歌あり

〈年若は餘寒中と。何處も出さぬ朝がほ。あたゝか成けるきさらきの。陽氣たつ春の半より。土を和らけ種まき育て給ひけれバ。誠に芽出しぞ揃ひける。花の數々三百餘種。斑入りの渦川何所共大事。けふは十りんあすは九りん。諸木安々と。咲出せバ好む事とてそうぐ〳〵がいくか。寅の一天より出します鉢の數。なぐさミ物につかハれ給ひ。商ひ半ぶんかゝらせ給ひて。家毎にせハしうさふらひける。大天狗〳〵。何處の内も大天狗。植たる鉢は何々。朝鮮三田。瑠璃の大鉢あかしあか繪や。南京ルスカウチ〳〵あまねく集めし。嘉介鉢見さいなと。出したる物は。大天狗日々に咲出すはなのさま見たれバりんだう茶だいちゞミ櫻咲獅子孔雀きれ咲數品　色々奇妙なる。かハり葉もさふらひしを。町々の好キたちや。手元につくらぬ素人衆まで。ゆきかふ有樣はゝけにも盛りの時なり。ころ也。諸方の國々。ちつくり〳〵ちく〳〵〳〵何處迄も弘まり。爰にも朝貞江戸にも朝がほ。どつこもかしこも幾年の樂しミと。御代の朝がほ

六月上旬より菖蒲

菖蒲諸色有双大流の仕ル

色葉より奇麗入と仕ます

朝ゝ御機嫌能花御覧ぜられ候ハ長芽ゝ出来ル事無疑年毎出来ル人ハ不出晴天ハ日ハ晴天ハ御所ハ特花ハ出来ル年彩花種数関東迄ハ花頂

[illegible]

[illegible]

一新柳葉　一殺り色ゝ

一諸色柳葉　一大柳葉　別ら下地ニ

一宇津木　一池ら和彩　池箱入ハ

一江戸新帰花形葉　播磨屋流儀

素人

せん　ふん　大阪からの花洛

花

いせぎ　波そや

かけ　祝ら

三都はいふに不及各國に流行せしかど文政二三年の頃より漸衰へ初て愛する人もわづかになれり

一　連々呼流行

連々呼とは上につらなる詞有て下これに響き通へるをいふ委しくは連々呼式といふ小册あり

寶　來　の　三　方　は　橙（ダイ）の　臺
團子の中に砂のあるは　いし〳〵の石
金銀の爲に命を失ふは　よく〳〵の欲
實　盛　の　鬢　髭　は　むしや〳〵の武者
佐野々渡りの夕くれハ　ゆき〳〵の雪
掴ミ合ふ喧嘩を取おさへてどふした譯じや　はなせ〳〵の咄せ
はやらぬ女郎の無筆は　よんでくれ〳〵の讀でくれ
展（マヽ）　觀（クヘン）　の　座　敷　は　志よ〳〵の書
福壽艸の根がふえたは　めでた〳〵のめでた
阿蘭陀の蟲目鏡は　あり〳〵の蟻
桶取の踊の手は　でん〳〵の傳ン
梶原源太の先陣詞ひハ　うぢ〳〵の宇治
苔清水で金拾ふたは　とく〳〵のとく

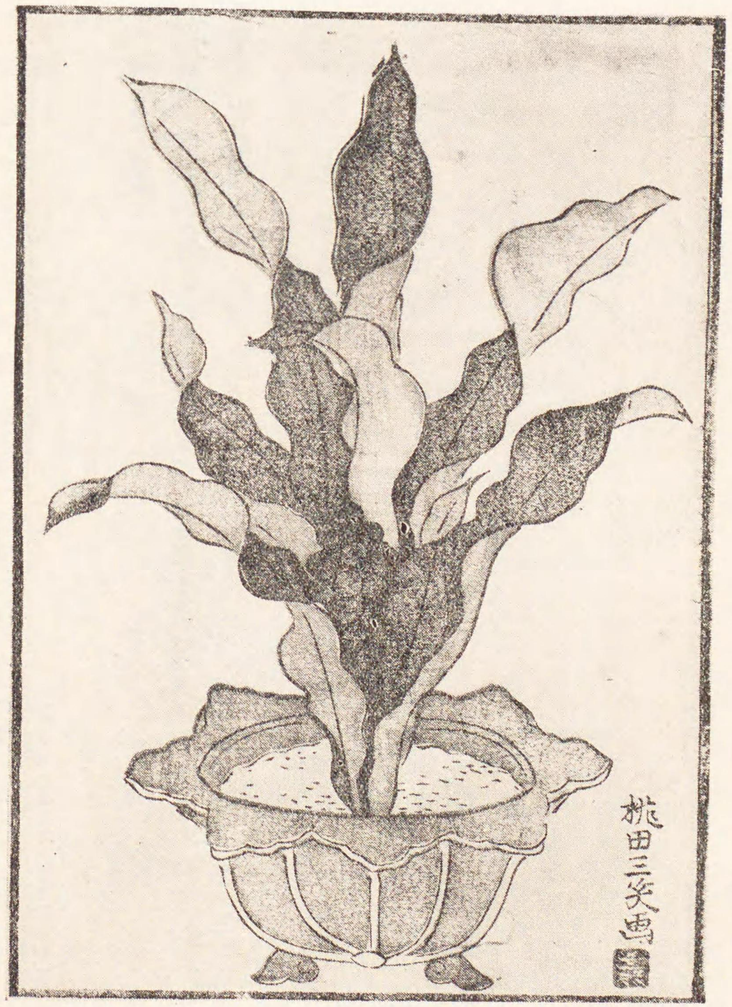
追剝のくわへ烟管は　すつぱ〳〵のすつぱ

〔編者曰ク原本此ノ行壹行空白〕

一　カナアリヤ　來舶

此小鳥高金の價にて諸人翫ぶ然れ共後々は此鳥多く相成價も次第ニ下落ス

一　萬年青（オモト）　石菖蒲　流行



世諺に貧漢好樹といふことあり予思ふにさからす富るは物に飽て養生の道遠からす貧きは事に足らで閑なること能はす居易の術をうしなふさるにかの好樹の輩は生植自然のたのしミをたのしんて富るも哥酒のかまひすきを用す貧しきも姦邪の危を出て閑に天然を終に足るされや貧乏の樹を好ハ予かすける心にては優に有かたきことにこそ又或書に異草奇花ハ地の文章也故に文雅人かならすこれをもてあそふと此言まことに由あるかな抑盆樹の世に翫もの多か中に蘭菊百兩金石菖蒲萬年青なと品類こも〳〵書つ是皆天地ノ如用造物者の奇巧なれは我も人も愛翫せすんハ有へからすこゝに予友青齋殊に石蒔を愛する癖あり異類を集て漸々數品に及ひ同好また都鄙にひろごる盧同はちらす茂叔か說にはかそへのこせるといへとも此艸閑雅の趣ありて清賞一物なりよてこたひ其品類のあらましを揚て猶同好を遠近に擴せんとす此樂や盆の上の觀といへとも天地の自然にかなひ春秋のうつりかハるも葉をめて花をなかめて老のまさにいたらんとすることを忘るゝは眞に此たのしミなるをや

平安　耕蒐老人誌

石蒔　本綱

一名

石　蓬　別　錄　杜　蘭　同　上　百丈鬚藥　譜

劍　斛　醫　級　林　蘭　綱　目　金　釵　同　上

千年潤　同　上　禁　生　同　上　長生草　物理小識

石蒜草　康熙字典

イワトクサ　和名

スクナヒコノクスコ　和名鈔　イワクスリ　同上

スクナヒコクスリ　大同類聚　ミタカラ　同上

品類

剛葉之部

唐石斛　一名琉球又温州　石斛トモ云　白花青莖

日光丸　日光山ヨリ始テ出テ盆栽トナル其後再ヒ山ヨリ出ルコトナシ

大江丸　丹州ノ産至テ大ナル圓葉ナリ

小丸　勢州ヨリ出　葉小シテ奇品ナリ

青丸　大葉ニシテ光アリ濃州ニ僅ニ數莖アリシヲ今洛ニウツス

緑輝　唐ニ似テ葉光アリ白花ナレトモスコシウツリアリ但シ野産ノモノニアラス

土佐　葉ホソクアツシ莖黄色ヲ帶タリ

鹽竈　葉アツク莖タクマシク一種ノモノナリ

斑文并條之部

金花山　始濃州岐阜ヨリ出ル上々品ナリ　中斑白莖

白條　諸州産數品アリ白クハセヨキシマヲ上品トス

中斑條　中斑ノ位置ニテ條目アリ

刷目　緑ヨリハキコミタルゴトキ斑ナリ

黄條　黄色ナルシマナリ諸州産アリ

圓葉中斑　平安盆上ノ化種

銀邊之部

巖古今　白クヘリヲトリテ青莖白花上々品ナリ

入江　始紅ノヘリヲトリテ後白クハゼルナリ　葉アツク光アリ

上田　大體入江ニ似テホソシシホラシキ形アリ　江州産

名護屋　上田ニ類シテ大同小異ナリ尾州ノ産

丹州紅　フカク紅ヲカケ出ル

金覆輪　黄ナルヘリトリナリ

圓葉銀邊　平安ニテ盆上化種

異種之部

黄石蒜　青莖白花

四季咲　薩州石蒜

梅花樣　菊花樣

こゝにあらハす數品は皆同好中に栽る所のもの也かつ石蒜はもとより深山幽谷の産なれハ此外いまたまたしく見さるの奇品あらんことをおそるゝのミ

畫にかけるをうなを見て徒にこゝろを動かす艸木を鉢植にして弄び樂しむはその好るこゝろを慰めんや近世鉢植流行の時をなしてたち花を愛し蘭を尊ミ或石菖石蒜のたぐひまでも弄ふ人のおほひなるといへどもおもとなんある事をゝる人のなきにしもあらねど深く高品の數種あることを尋ねず足もと近きに捨置はかりの雜品のミを打やりに見なす事のほいなし夫おもとハ書籍にも一通にあらて俗名老母草合類ニ藜芦國史ニ千年薑三才圖會ニ萬年青（オモト）とありていとめてたき草にして唐土にては一切の祝義にこれを用うることゝかも花鏡に現然たり爰に其品類の數種を集て我々にこれを撰めよとのもとめいなミがたくて剪齋篠島舍諸共に鼻をうごめかして調へるも浪花のあしのよしと思へば

青葉部

宗碩　葉厚くしてかたし葉先に立しほありよくたち葉にてもと細くすゑひろし

鍬形　葉厚くいたつてかたくいきほひあり兜のくわかたのさまありて葉先とがりたり

名古屋丸　葉くわ形にして葉先丸し

大象觀　葉厚くりきミありかたちおふやうに見え象のおもかけにもならんや葉巾五寸にも及ふもの也

薩摩丸　丸葉立にして宗碩に似よるもの也

芭蕉　葉ひろくばせを葉の趣にして葉につやあり

蘭葉　細き立葉にしてひかりありらんの姿をなせるもの也

朝鮮鍬　葉のかたち丸葉の鍬かたに似てうすく葉すこしみぢかし

飛龍　此實粒かず多く生ず葉もいきほひよし

替實部

黄實嶋　葉にゝまありて黄實也尤白斑黄斑有白斑を最上とす

黄覆輪　黄實にしてふくりんあり

青實　此實さきにとがりあるを最上とす又一種とがりなき青實ありこの葉は立のびて葉さきそとへまがるもの也

樺實　立葉にして實の先とがるを眞のかばとすまた一種蘭葉に似て冬の内は青實にて春にいたつてかば色をいだすあり

黄實　此實濃き薄きありてうすき色のかたを上とす蘭葉あり是又よしとす

久安寺　葉をゝまにして實にきよくあり始青く日をかさねて實も又ゝまをいたしのち赤くてるもの也

縞部

雪山　立葉にしてゝまいたつて眞白にて雪のごとく上品なり

布引　ほそ葉にてよくのび葉先そとへ少しまがるものなり立葉を上とする也

永　嶋　ほそく立葉にして美なり斑の性至て白くはぜるもの也
筑前嶋　葉大葉にしてよく立のびるを上品とす葉りんとたゝざるを中品とす小葉なるはこれに次
志加美嶋　葉の色濃くして片葉に斑入りたるあり又ふまもありいづれも斑の性極白也
伊勢嶋　葉のふますぢ白しといへどもにじミありて一種也尤立葉は至てまれ也

覆輪部

覆輪片葉　葉にふくりんを持なから片葉白し
大覆輪　此ふくりん深くいりてふとくはぜる也
覆輪嶋　葉ふくりんにてふますぢあり

虎斑部

虎覆輪　とらふありて葉にふくりんあり立葉を上品とす
薩摩虎斑　大葉の立葉にとらふあり尤宗碩に似よる葉形も有もの也
虎斑　葉形いろ〳〵あり尤斑の多くいりたるとふの白きとを上とす

奇品部

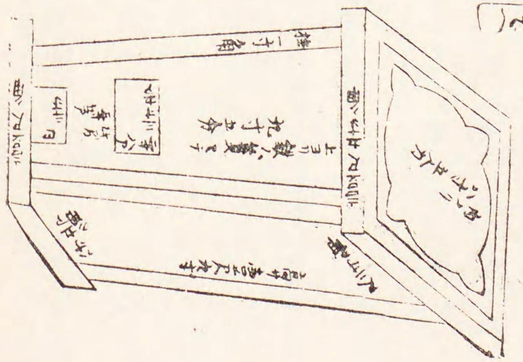
玉花葉　葉の先ばかりふくりんのごとくにしてつま白ともいへり
青片葉　青葉にして片葉白し
竹萬年青　土ぎはふぐらく竹の如くにしてうへにて葉をひらく此葉色々あり片葉斑入有爪白有ふまあり

ふくりんあり
豆藏　葉すぐれてちいさきもの也斑のあるはまれにしてこれを貴しとす尤ちごおもとゝもいへり
有松　斑ものふほりのごとくにして尤白斑也
宗碩嶋
鍬形嶋
虎宗碩
これらなきにしもあらねどその形狀の眞僞さだめがたけれハ巻末ながらこゝに出し置もの也
右以下の雜品ことぐ〳〵く是をあぐるにいとまあらざれハ名たゝるの有増をいだす尚以後好事の家にしてハ奇品の妙種必出生すべし其ためしなきにもあらねば樂しむべきのもとひならんや

撰者

浪華　知方齋文草
篠島舍九圃
催主南地植木屋生瓶
中筋同平兵衛
明石同源右衛門
甫助高津植木屋吉助

〔編者曰ク原本此ノ所五行空白〕



一　窕譚會

催主は歌舞妓狂言あやつり戯文の作者芝屋司叟なるもの唐山の稗史赤繩奇縁月下清談などを趣向の種として自作を交へ一夜の茶話としながばなしといふ其題號ハ

花魁　雉子　錦木　梵字　太刀
昆布　鴛鴦　栢毬　朝貞　狗
雲　浪　狸　瓢　賊
楠　燕　水　禿　櫛
油

荒增如此この窕譚の中にも櫛油朝貞などハよく人口に膾炙しまた劇場の狂言にも取組て毎々大當りなせり

一　教訓いろは歌のよみ賣流行ス

㋑　いつまてもたくハへをけよいろはうたよむたひことに身の徳となる

かゝる狂哥は俗中の俗なるものなれども專ら流行ニ及ぶ

堪忍
男女教訓
いろは教訓
上

い
ろ
は
に
ほ
へ
と
ち

いけるせんあるとわるさまへ
(ね)ねるまでもよどれかあるうのあるうぞえもーー
おとことでへさんひろまで
(れ)れまさるあれかけようーよ
やるめどこすれ
(や)やめどへるなるとこやるめやろえさげるで
けんへすかとりする
(け)けるやまものとせぶーかるよあるーーるよ
のらぬふあやのかーーと
(の)のーらーのへてわさまこれけてものりーひする
ムらふかるつめて
(く)くやるーふやるへらところれわり
きーあやかーこのあるとさーーぶーれあるーあんるさよ
(ま)まやーるるるとぶーれあるーあんるさよ
ちーあるーさー
(ふ)ふかーるかーたのふとりへるらひりのねること

一　浪華人物錄　文化改正

こゝに曾谷先生我浪華の鄕友錄を輯めて世に廣うし給ひてより既ニ春秋を經たること二十餘年されハ彼書ニ見えたる人々の世に現存せる纔に三五人に過ず今昇平の化に浴して文華日々に新なるに此集錄の久しく絶たる一事を缺たりといふべければあながちに思ひを起して今度錄するところ三百餘人儒家國學家より俳諧狂歌にいたりてすへて十五門いまだ博く尋ね普くもとめざれハ世にきこゆる名家の洩たるもおほかるへけれど徒に月日のうつらんことを恐れてまづ梓ニ上す前後のついでハ唯聞にもたかひたれハもとより老少優劣のたぐひに拘りたるにはあらず所號字等のつまひらかならんことハふたゝび訂正を加へて他日一小册となして世に廣くせんといふ

浪華書林　前川文榮堂謹誌

儒家部

いつみ町　中井履軒
よとや小路　關敬藏
江戸堀　篠嵜長左衞門
高らいはし　八木兵太
ばくろう町　渡邊東左衞門
すみや町　早野義藏
尼崎町　中井七郎
淡路町　越知文平
近江町　中村順藏
土佐堀二丁目　春田尙平
生玉　三村貞藏
舟丁　武内確齋
木挽丁　岡道修町　川口西洲
住吉陸　柳窓　伏見町　杉浦千輔
梶木町三宅幸藏　高ばし　横溝周介
瓦町　奥田素一　備後町　岡田貞二
三津寺町中村源吾　鍛屋町　林敬次

國學并和歌

梶木町　尾崎春藏
上町　有賀長基
今宮　川井立齋
今はし　弄花軒祖能
平の町　村上三介
布屋町　齊柏新介
江戸堀　淨光寺
座摩の前　上島源兵衞
堂じま　室谷仁兵衞
北野　尼惠遊
上町　有賀長收
再出關　敬藏
吳服町　甲田風也
天滿　金谷興詩
南久太　石津并輔
籠屋町　松村彦六
本鞍丁　小西伊兵衞
北久寶　行本吉右衞門
今宮　照女

連歌

天　滿　里村昌均
同　滋岡上野介

書家部

再　出　森川曹吾
同　篠嵜長左衞門
天　滿　吉田慶山
再　出　武内確齋
天　滿　米山人
平野町　奥田玄泉
尼崎町　筒井尚堂
堂　島　長尾圖書
再　出　三宅幸藏
尼崎町　仁木鶴齋
南久太　松與佳平
順慶町　竹村清藏
天　滿　滋岡上總介
同　江川正左衞門
天　滿　竹原澧水
住　吉　僧　環中
伏見堀　濱田杏堂
再　出　川井立齋
備後町　稻垣休叟
大黑町　早嵜篁齋
再　出　甲田風也
堂　島　田島嘉五郎
淡路町　藤井省吾
千秋はし　柳生權右衞門
炭屋町　福島三介
高らいはし　細谷齋宮

中橋すち　太平寺
なんば　峰岸啓藏
上　町　大原萬年

文畫部

再　出　濱田杏堂
同　八木巽所
天　滿　秦黃山
再　出　早崎篁齋
堀江長雄利介
梶木町　三井可亭
北濱瑞芝山人
津村名和魯亭
大黑町　早崎謙亭
堂　島　田邊柳堂
高らいはし　梅林串中
九郎右衞門丁　三好幸祿
同　米山人
介右衞門丁　西西渠
天　滿　岡田半江
再　出　森川竹窓
介右衞門丁　西竹坡
天　滿　中西石岳
吳服町　木村石居
尼崎町　木村片石
天　滿　七里玩古
伏見堀　安田幽石
天　滿　白山
彌兵衞町　大岡桃處
再　出　石津并輔

聞人部

再　出尾崎春藏
船こし町高岡素輔
再　出濱田希庵
再　出金谷興詩
再　出西　西渠
再　出中西石岳
再　出奥田玄泉
梶木町三井可亭
天　滿増田眞三郎
堂　島田邊淺溪
よとやはし七五三長齋
天下茶や村東正　圓寺

天文易算

長ほり閒五郎兵衛
堂　島藤田顯藏
伏見町牟禮龍庵
再　出早崎篁齋
同　米山人
道修町西村古愚
天　滿中西石門
安堂寺町杉本立澤
順慶町三井孝儒
中之島橋本貞元
南久寶坂上南宮
今はし風早耘堂
ほり江久田鬼瓦
長ほり閒清一郎
上　町松岡能一

堂　島眞瀨彦右衛門
久太郎町中村帶刀
淡路町井上主殿

印刻家

鹽　町前川虛舟
再　出武内確齋
同　竹原澧水
同　三井可亭
島の内化堂

畫工部

高らいはし法眼周峯
上　町岡熊岳
尼崎町中井藍江
平野町長山孔寅
本町小路藤九
高らいはし山中松年
過書町中富榮次郎
石屋はし森但馬
宗右衛門丁保科嘉一
再　出僧環中
同　森川曹吾
同　長尾利介
鹽　町前川壽山
江戸ほり貫名省吾
船　町森狙仙
順慶町淵上旭江
よとや小路森徹山
上　町大原東野
高らいはし森雄仙
吳服町同春溪

平野町　中芳　西よこほり　宮本君山
高らいはし　松本觀山　島ノ内　丹波桃溪
上町　蘭皐齋　淡路町　法橋幽篤
ほり江　月岡雪亭　安堂寺町　岡栗岳
今はし　高島千春　ほり江　多賀子健
瓦町　村上周康　鹽町　佐藤益之
本町小路　藤蟹洲　米・屋町　高井豐泉
安堂寺町　植田公長　渡邊筋　福原東岳
ほり江　多賀不退　東春堂
岩田町　橘保國　島白桃齋
農人はし　春調齋　天滿井上雪山
八軒や　藤村新五郎　中之島　上田愛山
順慶町　桂三木　戸や町　森周仙
梶木町　長井雪峰　津村　岩本有隣
内平の町　大岡春次　三休はし　古柳齋
砂場　吉村周幸　高津鶴樓

東口　蘆原玉東　ぱくろう町　古林齋
なんば新地　吉村周南　北久太　菅松峰
内平の町　一峰齋馬圓　住よし陸　祐吉

醫家部

中の島　大高元恭　豐後町　小泉隆郭
伏見町　吉益掃部　再出　濱田希庵
島の内　大矢尙齋　かごや町　藤方策
常安町　淡輪鹿介　ほり江　小松久吾
伏見町　小山田玄熊　平の町　佐久間玄龍
今はし　中西大助　再出　藤田顯藏
山本町　井後玄朔　瓦町　田中周庵
道修町　高一一齋　江戸堀　野呂典膳
うつぼ　柴田正均　小島町　原田泰順
再出　奥田玄泉　順慶町　三井元儒
同　牟禮龍庵　伏見町　古林温秀

上町　古林立庵
來島大順
順慶町　三宅意庵
梶木町　林泰仙
安堂寺町　橋本宗吉
北久太　澤周倫
鹽町　谷川達庵
伏見町　安藝良平
平の町　雲林院中禮
舟町　猶林昌元
ほり江　三木道哉
からじ町　西田耕悅
平の町　竹内宗碩
いたやはし　梶川安之進
大豆葉町　松生文齡
心齋はし筋　井上隼人

南本町　津田文吾
さこば　松本順庵
平の町　池田數馬
江戸堀　鵲橋元恒
島の内　各務宗二
解舟町　松尾元章
山本町　尾形貞齋
瓦町　雲林院玄純
京町堀　小宮山節齋
堂島　岩永敬翁
南本町　同文恭
北久寶　和田昌元
せんば　馬田昌嚴
米や町　安野正庵
南本町　植田相模
堂島　内藤數馬

堂島湯村愿庵
上町島好運
柳町片岡意仙
梶木町元木龜一
せんば三上大助
上町岡敬安
平の町德久松軒
江戸堀三島壽山
尼崎町桑田唱
せんゝ諏訪慈谿
伏見町栗山靜安

茶人宗匠家

立賣堀内本積有
佛後町稲垣休叟
上町青木宗鳳
天滿本庄信右衛門

高らいはし島好節
平の町笹井茂庵
せんば橋本順積
つぼ桃原堯民
島町馬田昌調
うつぼ柳主計
心齋はし筋元木蘭臺
せんゝ杉原外衛
あらか町岡養庵
今はし佐藤周德
博勞町來島桃逸

淡路町狩野宗朴
過書町住山宗全
本町勝閑宗眠
高らいはし細谷齋宮

こふく町　山田宗湖　　北はま　木津宗全
堂島　高島宗範　　天満　栢木宗方
立賣堀内　本宗有

茶人數奇者流

天満　法橋了壽　　今宮　宗了
備後町　森川宗兵衛　　ふしみ堀　平尾水翁
淡路町　和泉隱居　　上町　長濱屋源右衛門
江戸堀　傳法屋五兵衛　　長ほり　平野屋清左衛門
般若寺　大徹　　再出　名和八良平
四ツはし　河内屋武兵衛　　中の島　細谷與齋
今はし　眞島隆德

香道

北濱　林政五郎　　再出　尾崎春藏
再出　甲田風也　　炭屋町　福岡三右衛門

俳諧部

伏見町　吳竹菴木僊　　南本町　舟齋月居

谷町　其日菴尺艾　　疊屋町　黃花菴升六
南久太花屋菴奇淵　　本町　八日菴萬和
木挽町五春莊井眉　　相生はし　月夜菴三津人
再出七五三長齋

狂歌部

京町堀　戲咲筵遮莫　　江戸堀　桃李園栗窓
釘屋町　蝙蝠軒魚丸　　京町堀　百尺樓桂雄
天王寺　青々園蕪房　　上町　菊屋眞垣

〔編者曰ク原本此ノ所八行空白〕

一世上流行

復讐小說出板　　寺社名目の取退キ掛銀
寺屋縫物屋の野がけ　　土弓の店　　うふ湯邊ニ桃植ル
宮寺ニ櫻植ル　　自安寺妙見　　繪本の通りノ芝居狂言
羽折ノ下ニ半てん着ル　　生花ノ稽古　　婦女ノ紫衿
神社佛閣へ所書書張事　　貸シ傘に施主の名を書事　　歌舞の稽古
生壁色

小倉しま　小道具干店
江戸髷　野送りの禮墓所でいふ事
羽折ノ紐の短ひの　少女の赤帶
花美成ル藥店　江戸産物店
同櫛やうじ　長ィ羽折
辻けんノ人相　角力ニ見立た一枚すり
よろひ合羽　元祖巡
北濱すゞみ　家相方位
女の髪ゆひ　俗人ノ茶之湯
川魚生洲　網ふね
鰒汁　おかしい名の風藥
鮓店　座禪豆店
長樂寺小紋　雲州髷
切賣さかな五十五文店　粟田燒
男の茶うら　紀州そば
ひら打銀ノかんざし　かすてら燒

一一〇

瓦並のせんべい店
絹眞田帶おめ
大小の柄ニ紫縮面(緬)ノ袋
床代三文の淨留理
すびつの箱火鉢
子供ノおほこかづら
引まゝし
素人芝居
賣藥ノ赤かんばん
せんべい店
色付なしの普請
三田燒
大津湯
生姜ねり
呑酒ノ五文屋
杢摺ノ合羽

宣德燒　上布
金花山　うづら形小紋
ワナびろうど　ごろう覆輪
婦女のゆひ輪　淺黄ぼうし
山なり炭　鍋島うちわ
箱根細工　酒えん盆
自來也脇差ノさや　駿河細工
懷中手汐皿　江戸色のし紙
扇掛ケ　ばせを布暖簾
男ノ色わたほうかふり　橋々の豆茶店
漆紙こし張　江戸齒磨
子供の花火店　涼ミあんま
子供ノ獨樂店　大安うりノちらし
作り身ノおろし醬油　さめざやノ烟管筒
五德ボンボリ　物眞似會
清正公　本念佛

てつなんど色
唐奥島
白米五合入
ぶせう箱
男ノ日傘
繪半切
帋入ノ外人
役者似顔ノ摺もの
茶之子虎屋饅頭切手
藥法書ノ施印
公長風ノ畫
素人手妻
にしんノ丸だき
大根あらだき
神道講尺(釋)

町うちノ講（釋）尺場　書出しの俗醫　く　き　屋

横ニ張ル　かしや　猿　の　茶　店　伊　勢　講

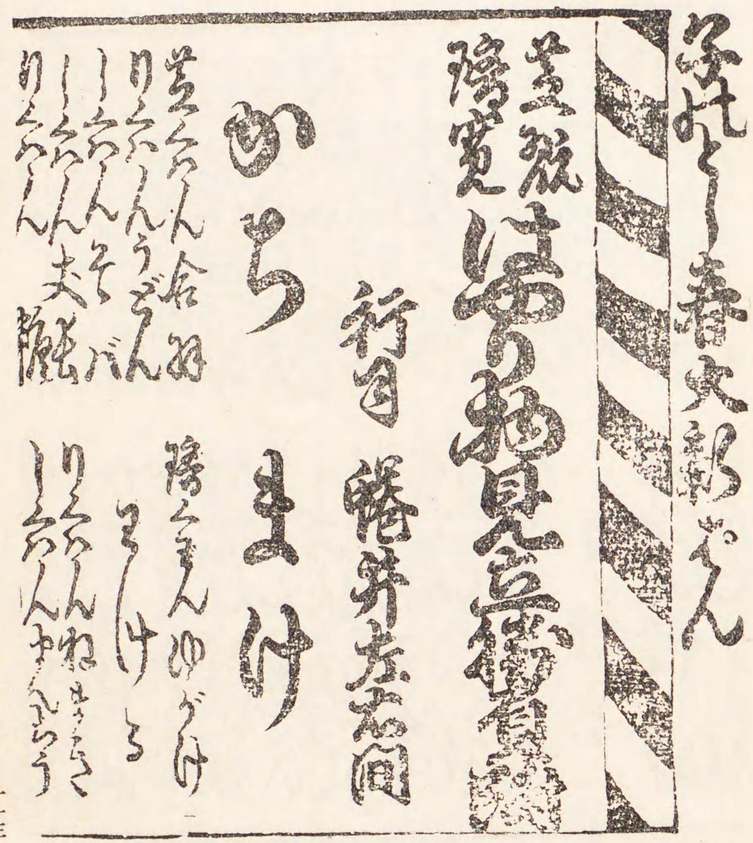
中　拂　な　し　稲荷穴めぐり　三味せん代けいこ

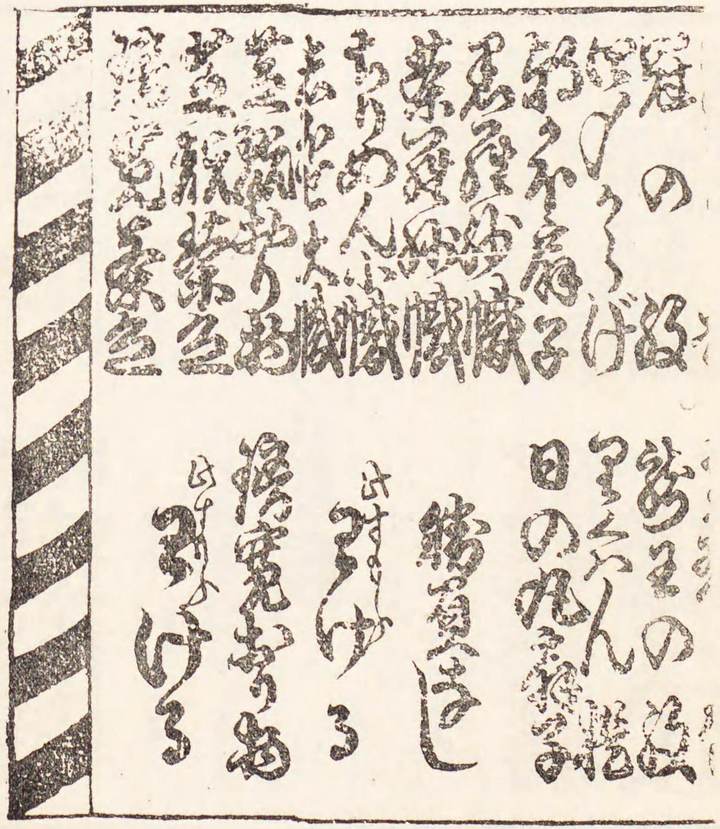
角力取進上大のぼり　座摩社内女太夫　手　帋　ノ　筆　工

同　舞　ざ　ら　へ　丁稚代り町小使　丁　稚　生　洲

肉色ノ市松人形　せんへい店ニにしき繪ノあんどう　錦　繪　ノ　日　傘

〔編者曰ク原本此ノ所半丁空白〕





乍恐御訴訟

藝道妨出入

布袋町
岡島屋芳三郎
願人　同家吉三郎
御前町河内屋久藏借家
相手　加賀屋歌五郎
同家歌右衛門
元伏見坂町
同　伏見屋善兵衛

一　右歌右衛門義は元來座摩稻荷之小芝居相勤者ニ御座ゝ所夫より風與角之芝居へ被召抱其後江戸表へ罷越彼地ニおいて出情(精)ゝ者ニ御座ゝ而江戸ニ而座頭之由承ゝへ共所詮私共藝道之妨ニ相成ゝ程之義は有之間敷勿論歌右衛門ハ當所ニ罷登りゝ與申ニは無御座然は當時私へ肩並へゝもの一切無之左ゝへは當所何方ニ哥舞妓芝居興行有之ゝ共私召抱不申時は町方氣受惡敷殊ニ女中方最貞厚棧敷抔賣ゝ事ニ而私安堵ニ藝道相勤罷在ゝ處五箇年以前右伏見屋善兵衛江戸表ゝ歌右衛門を召抱ニ遣ゝ處彼地ニ於而當時賣出ゝ歌右衛門ニ付容易ニ暇出シ不申依之善兵衛より遣ゝ手代共江戸金主へ段々掛合漸召抱ゝニ付其段書狀を以善兵衛へ申越ゝニ付早速歌右衛門招看板差出其砌私義は角之芝居相勤罷在ゝ處右看板差出ゝてより私芝居見物薄く相成甚歎ケ敷存ゝ

所古來より無之迎ひ船を出シ東堀乘場より道頓堀中之芝居前迄兩側ニ篝火を焚誠ニ天神祭を欺ゝ義ニ而見物
羣集仕私蔑ニ仕ゝ致方不屆至極ニ存ゝ無程初日忠臣藏之狂言二之替り狂言ニは故人富十郎小六玉を欺キゝ七
化之所作事外題は見習ふてちよつと七化と書ゝへ共見習ふて與申ハ古來より之所作より能と申意ニ御座ゝ而
初日出し諸人之目を驚し古人名人達之心を盡シ被置ゝ所作抔を蔑ニ致シ甚不實之取計我儘之至ニ御座ゝ私其
砌角之芝居ニ罷在達大礎狂言出ゝ處評判能大入ニ御座ゝへ共何を申ゝ而も七化所作事珍敷御座ゝ而評判高く
藝之惡敷ニ無頓着女中迄見物ニ罷越ゝ樣ニ相成私最屆を横領仕ゝ樣相成ゝは全七化差出ゝ故と奉察ゝ奥々も
古人名人衆方幷私を踏付ゝ致方不屆至極奉存ゝ

一　其後又々歌右衛門江戸表より召抱ニ參罷越ゝ所都而遠國へ參ゝ節は是非暇乞狂言仕其上發足仕ゝ而社古
來之仕來りを相用ひゝ義無其儀密ニ姿をやつし東海道へ不參外國へ相廻り我儘之取計立者ニ不似致方ニ御座
ゝ然共歌右衛門當所ニ居不申ゝ時は私義安堵ニ渡世仕ゝ義ニ付押而不申上ゝ

一　善兵衛義一己之利欲ニ迷ひ私難澁之義をも不顧又ゝ江戸表へ歌右衛門を召抱ニ遣罷登りゝ其節之乘込は
誠ニ古今稀なる事ニ而芝翫仙共仰山成ル迎ひ船を差出し島之内道頓堀ハ祭禮之如く其日は雜喉場肴市迄も相
止俄ニ肴高く相成南邊ニ不抱肴屋衆甚難義ニ及びゝ且又暮方より東堀乘場道頓堀川筋往來不相成程之羣集ニ
而剩へ中橋を踏拔怪我人抔有之騷動致させ御上をも不恐致方重々不屆至極ニ奉存ゝ

一　私其節は京都四條ニ罷在ゝ而右乘込之樣子委敷及承ゝ然ル所私義中之芝居より召抱ニ參ゝへ共早速應對
も出來不申中之芝居銀主共も當時角之芝居之繁昌ニ恐れ仕打寄合も不都合ニゝへ共何角なく看板差出シ薄雪

替り狂言片岡仁左衛門を召抱可仕處善兵衛義手段を以右仁左衛門も角之芝居へ召抱彼是隙取ゝニ付而は瑪寛
與申者は発角役をいぢり得不致億(臆)病者抔與惡評を受甚迷惑至極ニ奉存ゝ右薄雪狂言内外故障有之看板出ゝ而
より餘程初日迄隙入ゝニ付町方不評ニ相成ゝ所角之芝居石橋之看板差出甚評判よく依之私芝居之銀主より望
ゝは此度は是迄之狂言形を替實惡相勤め奥ゝ樣申ゝ私心底ニは叶ひ不申ゝへ共前々不評ニ相成ゝ義不得止事
實惡相勤ゝ所狂言はかなりニ出來ゝへ共発角見物薄く依之切狂言ニ千本櫻鮓屋場梶原平三私相勤ゝ所見物も
不相替薄く右ニ付私心痛仕夫より病氣ニ取合無據芝居相休罷在ゝ

一　私義幼少より立役一通りニ而大達者ニ可相成存心ニ有之ゝ故手踊幷所作など稽古一切不致此故は古人黑
谷文七幷八藏大五郎親吉三郎抔立役斗相勤罷在ゝ私義其意を相含ミ所作抔一向不仕歌右衛門義所作不仕ゝハ
ゝ私少も恐不申ゝへ共狂言替りゝ度毎ニ所作を出し諸人之心を動し私藝道相妨甚歎敷奉存ゝ何卒御威光を以
テ歌右衛門幷善兵衛被爲　御召向後所作事不仕ゝ樣被爲　仰付被下ゝ樣奉願上ゝ私家業相休ゝへは猪三郎冠
十郎團八右三人共渡世ニ相放ゝニ付而は私を相恨ミゝ樣ニ成行此段迷惑仕ゝ

一　歌右衛門御當所へ罷歸り不申ゝ内は世上一同着用もの抔瑪寛茶染與申ゝ而男女共着用致シ甚流行仕ゝ處
近頃は世上一統其義忘却致シ芝翫染或は鶴菱小紋其外帋入南艸入帶地類色々京都より差下ゝ櫛かうがいかん
ざし尺長金物るゝ夜店くだもの屋行燈ニ鶴菱を付ケ日傘天窓之蓋のごとく致シ鶴菱を付甚てふ〳〵敷新規之
義流行致シ誠ニ私を蔑ニ仕難澁至極奉存ゝ何卒御慈悲之御威光を以向後歌右衛門所作事停止被爲　仰付被下
ゝハヽ廣大之御慈悲難有可奉存ゝ以上

年號月日

乍恐返答

御前町河内屋久藏借家
加賀屋哥五郎ニ同家
歌右衛門

吉三郎印　一二〇

一　布袋町岡島屋芳三郎ニ同家吉三郎より私幷元伏見坂町伏見屋善兵衛相手取藝道妨出入被願上ゟ願書御見せ被成下依之乍恐卽答奉申上ゟ

一　吉三郎申立ゟ通私義幼年より若太夫堀江所々宮芝居相勤ゟ者ニ御座ゟ又吉三郎義も幼少之砌竹田近江からくり芝居ニ而座本名前を上ケ相勤ゟ義も有之其後は暫く子供芝居中絶仕其後廿箇年以前より又々子供芝居興行共承り及びゟ其外故淺尾爲十郎幼名龜谷彌太郎吉三郎親吉三郎等は幼名竹田吉三郎と申竹田龜谷子供共ニて御座ゟ是を申立ゟ事は無益之事と奉存ゟ別而當吉三郎義藝道器用者ニ而人品骨柄音聲辯舌等人ニ勝れ殊ニ澤村國太郎緣類と相成夫故國太郎を今ニ大切ニ被致ゟ趣承り甚感心仕ゟ此引廻シにより外役者衆も格別ニ引立宜敷段々上達被致當時ニ於ては肩を並ぶる者なき程之大立ものと相成給金等も高金を取り最屓も强く婦人方別而愛敬も有之棧敷も能く捌ケ自然と身元も宜敷衣裝等も立派ニ御座ゟ而適立ものニ御座ゟへ共何方芝

居ニ而も召抱度存ゟ私義は夫ニ引替幼少ニ而親歌右衛門ニ別れ漸弟子水木東藏後ニ中村哥右衛門與名乘らせ名前相續被致ゟ內是亦早世仕私義は孤子同前ニ御座ゟを母之養育ニ而成長仕誰あつて藝道引廻し吳ゟ者も無之せめて藝道修行之爲前々申子供芝居へ出勤仕聊藝の端をも見習ひ十八歲之砌故淺尾奧山下里虹鬢付屋文七等之吹擧之餘りを以角之芝居へ被抱敵役相勤其後小七芙雀等之引廻しニ預り役者之數ニも入時ニ寄りては大役之代り役をも相勤次第ニ自分之大役をも相勤ゟ事立者役者衆引廻しニより町中最屓之旁々餘情等全ク故父歌右衛門之餘光存世之母之慈惠之故與時々刻々朝暮淚と共に大慶ニ奉存罷在ゟ其中ニも藝者と申ものハ何によらず心掛可申事與故父之遺言ニよつて藝道修行之隙ニは手跡遊藝茶畫亂舞狂誹等習ひ得たる事一ツも無之ゟへ共心をゆだねゟて修行ニ隙なく中々外心を存じ或は人と爭ひ我勝れたりと思ふ心聊も無之勿論吉三郎へ對し踏付蔑抔與申儀且以覺無之ゟ當時之吉三郎と私義誰申となく見競にも相成ゟ義は嘸吉三郎にハ心外にも被存ゟ半與推量仕ゟ私ニ於ては上達烈々之吉三郎と一ト口ニ申されゟ事大慶至極ニ奉存ゟへ共實は氣之毒ニ奉存ゟ其後七ケ年已前藝道修行之外ニ故父歌右衛門兼而信仰之妙見宮へ參詣仕度江戶表へ罷下りゟ處仕合能彼地ニ而も評判宜敷在勤中無滯相勤ゟ內當地伏見屋善兵衛方より手代を差越江戶金主へ掛合も相濟首尾能暇を乞受當地へ罷上り中之芝居へ出勤仕顏見せ狂言忠臣藏七役相勤二之替り新狂言切ニ慣ちよつと七變化相勤ゟ處取立を以て芝居興行中評判宜敷母之悅び私大慶申盡がたくゟ此時七變化所作事相勤ゟ義を彼是申されゟへ共中々愚純(鈍)未熟之私所作事抔と申義は及び絶たる義ニ御座ゟへ共元來不調法成ル私ニ格外之高金を被吳被召抱ゟ義なれハ粉骨碎身仕ゟ而もせめて銀主之藏入宜敷やうと心掛ゟ義ハ私ニ不限義ニ而既ニ吉三郎も靑柳

彈正秋月大膳梶原平三入鹿大臣抔不相應之役相勤適大入致しゟ義はまゝ有之ゟ依之銀主之望ミ役割藝の善惡は差置立役はもとより實惡は松波藏人清盛七卿四郎若女形は戸無瀨おくミお三輪老人は齋藤太郎左衞門高師直政岡外記左衞門やつし役忠兵衞伊左衞門福岡貢敵役ハ前髪左兵衞三浦荒次郎稚立酒屋丁稚快童丸長吉其外老女道外役など所詮宜敷事ハ得不仕ゟへ共可相成たけハ相勵ミゟてこそ町方諸見物銀主へ之冥加と存相勤ゟ義ニ御座ゟ時ニ寄り外芝居之差障ニも相成事も可有ゟへ共銘々此心を以て相勵ミゟハゝ如何樣とも工夫可有義かと奉存ゟ尤時所位ニより大當り不當りハ時之なす處と役者之不心得故かと奉存ゟ此義私之所爲之樣ニ相聞へゟ而は迷惑ニ奉存ゟ勿論故人名人衆立役一通りニ而諸見物之受能は其人々之功者上手之業ニ御座ゟ未熟不練之私共は何を致して成共兎角評判能を願ふ事ニ御座ゟ然ル所江戸表ニ内外掛合之義も有之密ニ彼地へ罷下りゟ此時道中筋は費用も多く又故鄕加賀國へも立越申度態々木曾路より千辛萬苦して罷下りゟ而暫らく堺町芝居相勤暇乞一世一代狂言十日替り取替首尾能昨亥十一月八日又々角之芝居へ出勤仕ゟニ付鰕十郎門之介花友其外召連罷登りゟ乘込之義は吉三郎申立られゟ通殊之外賑敷成程古今前代未聞之義ニ而私義も大きニ驚き且は大慶外聞旁願ひゟ義常ニ御座ゟ箇樣ニ賑ひゟ義を偏執ニ存ゟは甚見苦やうニ奉存ゟ尤外々へ對シゟ而は恐多く奉存ゟへ共最員之方々より祝ひ被呉ゟ義は誠ニ難有儀與奉存ゟ全く吉三郎へ當テ付ゟ心は毛頭無之ゟ事

一　所作妻相止ゟ樣被申ゟへ共なんぞ私ごとき之致しゟ事恐るゝニ足ざる事ニゟ是又銘々器用不器用ニ而勤んと存ゟ時は曲ミ成りにも相勤申ゟ此義差障りニ相成ゟハゝ吉三郎方ニは其答當時は海老丸と改名致シ堅固

ニ罷在ゟ事なれハ相談被致ゟハゝ早速稽古も出來可申私義は誰を師匠と申義も無之唯不拍子なる所が却而愛にも相成ゟ哉所作と申もおこがましくゟへ共銀主より望之節は耻を捨て相勤申ゟ勿論同じ藝道之連友ニゟへハ相互ニ水魚之思ひをなし私不存義は吉三郎ニ承り度又萬一吉三郎心ニ不叶義も有之は傳授指南と申ニ而は更ニ無之ゟへ共無隔意相談も仕度ゟ病氣之儀は無是非事ニゟへ共自然芝居休ゟ時は銘々相應之弟子迄も困窮仕ゟ義私迚も同じ事ニゟ而身分不器量を悔ミゟより外は無之ゟ當時流行之染色或は小紋調度之類は求ル人之心ニ有て私ニ不抱(抱)義與奉存ゟ是迚も私より相賴ミ流行ゟやうニ致ス抔と被申ゟは嬉敷ゟ得共時々折々自然と流行ニ及ぶ事ニ而是も如何與被存ゟハゝ璃寛染之流行可致やう工夫被致ゟ而宜敷奉存ゟ其節私ニおゐて差障り一切無之ゟ其外吉三郎へ對し宿意等差はさみゟ義無之ゟ閒心を解ケ相互ニむつまじく和熟仕度奉存ゟ何卒以御慈悲吉三郎納得仕ゟ樣被爲　仰付被下置ゟハゝ廣太(大)之御慈悲與難有奉存ゟ以上

歌右衞門印

本伏見坂町　伏見屋善兵衞

前文歌右衞門申上ゟ通無相違奉存ゟ私義相手取江戸表ニ而歌右衞門召抱ニ遣シゟ義私一己之利欲之樣申立ゟへ共全左ニ而は無御座ゟ既ニ歌右衞門罷登り出勤仕ゟ節は芝居も年中興行相成道頓堀茶屋駕入方或は魚鳥青物菓子酒家業之者辨當引小便取紙屑拾ひ其外芝居掛りの者木戸大ぜい部屋役者馬の跡足床山樂家番茶場菓子賣大工日雇此者共ニ付添妻子其外數多かぞへがたき程之多人數一統安々と渡世を相凌ゟ町方ニ於ては呉服染